
不機嫌な死神

R-third

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不機嫌な死神

【Nコード】

N2650L

【作者名】

R - t h i r d

【あらすじ】

飛び降り自殺をしようとした『俺』と、自分の担当エリアで予定外の死者を出したくない、とびきりかわいくて、とびきり口の悪い『死神』。

彼女の提案で俺は、1日だけ彼女の助手を担当することになったのだけれど…。

プロローグ 出逢い（前書き）

作品の性質上、死を扱うシーンや、暴力的なシーンが出てきます。
ご理解いただける方のみ、閲覧お願いいたします。

うっかりしていて、最初短編で表示していました。
申し訳ございませんでしたっ！！！！

プロローグ 出逢い

その日俺は学校の屋上で、ぼんやりと成績の事、父親の事、そして自分の将来について考えていた。

小さい頃に母を病気で亡くした俺は、私立病院で脳外科の医師を務める父と、二人で暮らしている。

子供の頃の夢は父と同じ、『おいしゃさん』になることだった。ただ他の人間の命を救うため、母が死を迎えるその瞬間に立ち会う事が出来なかった父を見て、その夢に疑問を持つようになった。知らない人間を助けるために、大切な人の最後の一瞬と一緒に居る事の出来ない人生なんて、自分には何の意味もないような気がした。

それでも父は、俺に医者になってももらいたいらしい。成績は中の上、といったところで、彼の希望通りの進路は今のところ厳しい。

けれど父は無責任に、『頑張れ！』なんていう。

そもそもそれは俺の夢ではなく、あなたの夢でしょう？

たぶん周りの人間から見れば、自分は幸福な人間なんだと思う。金銭的にも恵まれているし、友人も多い方だろう。

でも誰も、本当の自分を理解してはくれないのだ。それが、酷く空しい。

明るくて、いつも元気な人気者。
そんな人間、本当はどこにも居ないのに…。

「もういつそ、死んでしまおうか…。」

そうすることで、すごく楽になれる気がした。

夢もなく、将来への希望もなく。

ただ漠然と、生きていくよりは…。

屋上の手摺を超え、ゆっくりと下を見る。

…これでもう、何も考える必要がなくなるな。

最初は突発的な行動だったが、それが正しい答えの様な気がしてきた。

そして俺は手摺から手を外し、一步前へと体を進めた。

ああ、本当なんだな。

…死んでいく瞬間に 今までの人生が走馬灯のように駆け巡る、ってというのは。

ぼんやりと、そんなことを考えながら落下していったのだけれど。

…突然俺の体がふわりと抱えられ、上昇するのを感じた。

無意識のうちに、俺を抱きかかえる「誰か」の方を見上げた。
背中に大きな…羽根？

「…天使？」

俺は思わずそう呟いて、それから意識を手放した。

第一話 死神の助手？

意識を取り戻すとそこは、再び俺が通う高校の屋上だった。

大きくて勝気そうな瞳で、美少女が寝転ぶ俺を見下ろしている。

短いけれどつややかな、栗色の髪。透き通るような白い肌。

化粧はしていないようだが、赤みを帯びたちよつと厚めの唇。

…でも羽根は、見当たらないな。

落ちる瞬間に助られたのを、俺が錯覚しただけだったのだろうか？

ぼんやりと彼女を見つめる。

少女は黒と白のボーダーのＴシャツにグレーのクラッシュデニム、黒のブーツというファッションに身を包んでいる。

胸元には、スカルをかたどったシルバーのネックレス。

背中には、小柄な彼女には少し大きすぎるんじゃないか、という感じの黒のリュック。

…ちゃんと着飾れば絶対、もっとかわいいんだろっなあ。

そんなことを考えていると、彼女は突然大きな声で叫んだ。

「ちよつと、お前っ！

人のエリアで、何勝手な真似しようとしてんだよっ！？」

可愛らしいその容姿とその言葉のギャップに俺は、ぎよつとした。

「…つたく。」

死ぬな、とは言わねえけど、私の担当地区の外でやりやがれっ
んだっ！

はつきり言っただけで飛び降りなんかやられたら、迷惑極まりな
いんだよっ！」

俺を助けようとした訳じゃ、ないのかな…？

ぼかんと口を開けて見つめていると、彼女は頗る嫌そうに眉間に皺
を寄せた。

「と・に・か・く！

死ぬならよそに行っただけでやってくれよなっ！？」

…つたく、マジで分かってんのかよっ？

今度やりやがったら地獄へ送り届ける前に、私が死ぬより恐ろし
い目に遭わせてやるからな…。」

そう言っただけで、少女はにやりと笑った。

その表情はとても綺麗なんだけれど、ただ大人びているというより
は、何もかも知りつくした老婆の様で。

俺の背筋はぞくりと震えた。

「じゃあな！」

そう言っただけで彼女は灰色の羽根を広げ、空に飛び立とうとした。

…つて、ええええええええっ！？」

慌てて俺は、彼女の腕を捕まえる。

その拍子にバランスを崩した彼女は、地面に叩きつけられた。

「…てめえ、何しやがんだよ！？」

「やっぱり、天使なのか!？」

俺が聞くと、彼女は心底嫌そうに口をへんの字に歪めた。

「…違う。」

「じゃあ、君は…。」

俺がそこまで言うと彼女は、面倒臭そうに溜息を吐いて告げた。

「…死神、だよ。」

第一話 死神の助手？

「…死神。」

俺が小さく呟くと、迷惑そうに彼女は言った。

「でも私を見たって事、誰にも言うんじゃねえぞ？」

…こんなくだらねえ事でペナルティー喰らったら、堪ないからな。」

それから彼女は再び、羽根を広げた。

「…やっぱり、死んじゃおっかな。」

俺がそう言っていると、彼女がぎろりと俺を睨みつけた。

「…人の話、聞いてたのか？」

低く凄むように言われたけれど、死を覚悟していた俺にはもう、怖くもなんともなかった。

「聞いてたけど、俺、死にたい気持ちに変化はないし…。」

それに、他のエリアとかよく分からないけれど、ここが一番お誂あつぱえ向きな気がするしね。」

につこりと笑ってそう答えると、彼女は静かに瞳を閉じた。

「…分かったよ。」

じゃあせめて、死ぬのは明日にしろ。

これから24時間、私に付き合えっ！」

そう言うと彼女は、再びにやりと笑った。

しかしそれは先程の老婆のような表情ではなく、悪戯を思いついた子供のような笑顔。

「…面倒臭いな。」

俺の言葉をふん、と彼女は鼻で笑い、言った。

「お前に決定権は、ないんだよ？」

それから彼女は、胸元のスカルのチャームを両手で握った。

するとそれはあつという間に形を変えて、映画などでよく見かける、死神の鎌になった。

「覚悟しろよ？」

そう言つと彼女は鎌を振り上げ、俺の首をざくりと切り裂いた。

茫然とする間もなく、俺はふわりと宙に浮かぶような、不思議な感覚を覚えた。

下を見ると俺が無表情に目を瞑り、倒れている。

彼女の手には再びスカルのチャームが握られていて、先程の鎌は既に姿を消していた。

「…幽体離脱？」

俺は、聞いた。

彼女はニヤリと不敵な笑みを浮かべ、答えた。

「まあ、そんなとこだ。

ただし24時間以内に戻らなきゃ、お前の肉体と精神は永遠に離れたままだ。

まあ、死ぬつもりだったお前には、どうでもいいことかもしれな

いけどな。」

それから彼女は羽根を再び広げて、ふわりと空を飛ぶ。
その姿は死神というよりも、やはり天使のように綺麗で。
…思わずその姿に見惚れていると、彼女が耳元で囁いた。

「お前ももう、空を飛べるんだから。」

…飛んでみな？」

飛び方が分からないと伝えたと、彼女は俺の手をとった。
その瞬間俺の体は、彼女と一緒に空にふわりと浮かび上がった。

「お前の場合肉体はないから、好きな様に空を飛ぶことが出来る。」

今日は一日、私の助手をやってもらおうか？

お前の所為で時間が少し押ししてんだから、責任をとれ。

…ちゃんとして来いよ？」

そう言うと彼女は、もの凄いスピードで空を飛び始めた。
だから俺も、慌てて彼女のあとを追った。

どのくらいの間 そうしていただろうか。
気がつくと俺達は、大手銀行の前に到着していた。

「…こんな所で、誰か死ぬの？」

俺が聞くと、死神は無表情のまま答えた。

「ああ、死ぬ。」

これからここで、強盗事件が起こる。

そして追いつめられた犯人が、拳銃を乱射。
…その所為で、死者がでる。」

「…死者つて、何人？」

「…4人だ。それと他に、3人が重体になる。」

「…止められないのか？」

俺が聞くと、彼女はピクリと眉を動かさず、こちらを振り返った。

「自分は死ぬつもりだったくせに、他人の死には心が痛むのか？」

…まあ、いい。

これは、あらかじめ決まっていたことだ。

お前はただ、私の命令を聞けばいい…。」

俺は何も答えず、ただ成り行きを見守ることにした。

第二話 決められた運命？

「…そろそろだな。」

彼女はそう言うと、閉まったままの銀行の自動ドアを静かにすり抜けた。

「お前も来いっ！」

閉まった状態のドアから腕を出し、俺の手を引く彼女。そうすると俺の腕も、開いていない筈のガラスのドアをスッと通り抜けた。

成程ね。俺は今、幽体離脱中だもんな…。

それに死神というのも、実体はあってないようなものなのかもしれない。

だが物質を通り抜けるその感覚は、正直気持ちの良いものではなかった。

「…あの男だ。」

彼女が指差す方向をみると、そこにはフード付きのパーカーを目深に被り、サングラスを掛けた、いかにも怪しげな30代前半くらいと思われる男がソファアに腰をかけている。

その眼は絶え間なくキョロキョロと動き、その様はまるで自分是不審者です、と言っているようなものだった。

しかしその男に注目する者は誰もおらず、銀行内はいつものようにバタバタと忙しなく行員が動いてはいるものの、穏やかなものだった。

「もうすぐアイツが立ち上がり、一番左の受付へ向かう。それから、拳銃をあの一歩前に並んでる女に突きつける。」

言われた方向を見てみると、上品な感じの初老の婦人が立っている。

「その後あの行員に向かってバッグを投げて、金を要求する。」

「…まあ、べたな展開だな。」

彼女はつまらなさそうに、そう言った。

「で、こっさりあつちの行員が非常ベルを押して、そうこうしてる間に警察が駆けつけて。」

「…自棄になったあの男が銃を乱射して、犯人を含む4人が命を落とす。」

俺はゴクリと、生唾を飲み込んだ。

「残りはその老人と、行員か…。」

「…じゃあ、あとの一人は？」

「あそこにいる、3歳くらいの幼い少女だ。」
何の感情も持たないかの様に、彼女は告げた。

「…助けられないの？」

俺が思わず聞くと、彼女は目を瞑り、静かに首を横に振った。

「決められた運命だと、言っただろう？」

それより、お前の仕事の内容の説明をしておく。

「…絶対、しくじんなよ？」

彼女は静かに告げた。
そして大きな黒のリュックの中から、なにやら長い棒のようなものを取り出した。

…これってまさか、虫取り網っ!?

それにそのリュックから取り出すには どう考えても長すぎるだろうっ!?

呆然としながらその様子を見詰めていると、彼女またしても馬鹿にした様に鼻で笑い、言った。

「お前ら人間の常識を、私達に当てはめるな。」

「死んだ奴らの首を鎌ではねたら、この網でそいつの魂を捕まえる。それからこのリュックの中に、魂を閉じ込めるんだ。」

…失敗は、許さねえ。」

分かるな、とでも言うように、彼女は俺の目を覗き込んだ。

「もし、失敗したら?」

俺が聞くと、彼女は心底面倒臭そうに答えた。

「その魂は、悪霊になる。」

「一生成仏することも、再生されることもなく、現世を彷徨^{さまよ}う事になる。」

まあ大抵は大人しく捕まるが、稀にそうじゃない場合がある。」

「…そうじゃない場合?」

「現世に未練を残してたり、自分が死んだ事を理解出来ない奴だ。」

…そういう人間の魂は、かなり厄介だな。」

それから眉間に皺を寄せ、彼女は告げた。

「さあ、無駄口を叩くのはもうお終いだ。…始まるぞ。」

第二話 決められた運命？

彼女がそう言った瞬間、男がゆっくりと立ち上がった。

彼の眼は相変わらず拳動不審に、キョロキョロと絶え間なく動いている。

一歩、二歩と、一番左のカウンターに近づいていく男。

そしていきなり走り出したかと思うと、先程の老女を羽交い絞めにし、拳銃を背中に突きつけた。

「きゃーっ！！！」

女性の悲鳴が、銀行のフロアに響き渡った。

何事か、といった様子で、皆が一斉に声のした方向を振り返る。

更にあちこちで悲鳴が上がると、今度は男が大声で叫んだ。

「うるせえっ！」

騒ぐ奴は、女子供でも容赦しねえぞっ！？」

その瞬間、辺りはシーン、と静まり返った。

彼女の言った通りの展開に俺は全く動くこともできないまま、ただ茫然とその様を見守った。

「金を出せっ！有り金全部、このバッグに突っ込むんだっ！」

それから誰も出入り出来ねえ様に、シャッターをすぐに下ろせっ
！」

受付にいる銀行員の女性に、叫びながら大きなグレーの旅行鞆を投げる。

拳銃の銃口は、相変わらず女性の背中をとらえたままだ。

「ひっ！」

行員は小さく悲鳴を上げ、店長らしき中年の男の方を振り返った。

彼は顔面蒼白のまま、震えながらコクリと頷いた。

静かに、ゆつくりと、シャッターが下りていく。

その瞬間、銀行にいる客達の表情が、絶望に包まれていくのが分かった。

端の方にいた別の女性銀行員が、不自然に机の下に手をやっているのが視界に入る。

…あれが死神の言っていた、非常時用の通報ベルか。

犯人の男は、その様子には全く気付いておらず、いっぱいになっていくバツクを満足げに見つめている。

このままじゃ、まずいっ！

本能的に駆け出そうとした瞬間、死神が俺の腕を掴んだ。

「…お前の出番は、まだだろう？」

お前がどう思おうと、何をしようと、こいつらの死は免れないんだっ！」

低く凄むように彼女は言った。

「…でもっ！」

思わず抗議の声を上げようとしたが、何か分からない違和感を感じ、

隣の彼女の表情を盗み見た。

…じゃあ君は、なんでそんなに悲しそうな顔をしているの？

その顔は、今にも泣き出しそうな、小さな子供のような表情で…。思わず彼女を問い詰めたい衝動に駆られた。

でも次の瞬間彼女の顔は、先程までの、冷酷なまでに無表情なものに姿を変えていた。

「どの道実体のないお前には、アイツらを助けることは出来ない。

…これはあくまで、仕事なんだよ？」

…それは俺に向けた言葉なのか、それとも彼女の心の叫びなのか。思わず俺は、彼女の手を握り締めた。

「大丈夫っ！ さっさとこんな仕事、一緒に終わらせよう？」

そう言うと、今度は驚いたように彼女が俺の顔を見上げた。

でもそれは、すぐに今日何度も見た、不機嫌そうな表情に変わった。

「…当り前だろう。」

お前は私を、一体誰だと思っているんだ？」

そう言うと彼女はまた、ふん、と鼻を鳴らした。

「そろそろ、警察が踏み込んでくる。

…足手纏いになるようなら、許さねえぞ？」

次の瞬間、非常口からたくさんの方官達が武装をした状態でバタバタと駆け込んできた。

男が暴れる間もなく、一瞬にして奴の周りは完全に包囲されてしまった。

「無駄な抵抗はやめろっ！」

彼らの銃口が、一斉に男を捕えた。

第二話 決められた運命？

追い詰められた筈の男は意外な事に、事件を起こす前に落ち着いた表情をしている。

「ゲーム・オーバーか・・・。」

残念そうに、ポツリと呟く犯人。

周囲は水を打ったように、静まり返っている。

「でも、一人では逝かねえよ？」

男がニヤリと、不敵な笑みを浮かべた。

そして次の瞬間、男が拳銃の引き金を引いた。

『どんっ！』

銃声が、銀行のフロアに響き渡る。

そこには背中から大量の血を流し、倒れこむあの初老の婦人の姿。

行内を、先程までの静けさとは打ってかわったパニックが襲う。

警察は奴を捕まえようと必死になってはいるが、一般市民の安全を考えると迂闊には手を出せないようだ。

「…行くぞ。」

死神は、小さな声で俺に囁くと、胸元のスカルのチャームを握った。その途端、チャームは再び姿を変化させ、死神の鎌になった。

「お前はこつちだっ！」

そう言うと先程の網と黒のリュックを俺の方に投げてよこし、彼女は初老の婦人の側に飛び出した。慌てて俺も、彼女のあとを追う。

『ざくっ！』

彼女が鎌を振り下ろすと、鈍い音とともに女性の体から、10cmほどの光る球体が飛び出した。

「早く、捕まえろっ！」

突然の事にパニックを起こしそうになりながらも、慌ててその球体を追いかけた。スピードはそんなに早くないから、意外と簡単にそれは網に収める事ができた。

「捕まえたら手でそれを掴んで、リュックに突っ込めっ！」

言われたとおりに大急ぎで球体を掴み、リュックに押し込む。それは、ぐにやりと柔らかくて生暖かく、何とも不思議な感触で。

これが、人の魂なのか・・・？

思わずじつと、自分の手を見つめた。

「もたもたすんなっ！次だっ！」

男は既に、目の前の女性銀行員を撃った後のようだ。

…頭部から血を大量に流しながら倒れている、制服姿の女性の死体。死神の鎌が 女性の首を目掛けて振り下ろされる。その瞬間、また光る球体が身体から飛び出した。今度のそれは、先ほどの女性のものと比べると、スピードがかなり速い様だった。

「くっ！」

大急ぎで追いかけるも、それはなかなか網に入ってはくれない。

「早くしろっ！ さつさと仕事、終わらせるんだろっ！？」

また彼女の、罵声が聞こえる。

やっとの事でそれを捕まえ、リュックに詰め込む。

その感触は先程のものよりもやや硬質で、そしてほんの少しだけ冷たい様だった。

そうしている間にも、犯人の男は更に2度、発砲したようだ。フロアは血飛沫ちしぶきで、かなり汚れている。

倒れているのは 若い男性が一人、中年の女性が一人…。この二人は、彼女の死亡予定者の中には入っていないな。これからの被害者は、重体が一人と、死亡が二人か…。

意外と冷静にそう考えている自分に一瞬ぞっとしたが、死神の怒声で再び我に返った。

「さつさとしゃがれ、このろまっ！」

次の死者が、もう出るぞっ！」

次に撃たれたのは、若い女性だった。

…死神が死ぬと言っていた女の子の、母親か？

「わあああつ！ママ〜っ！！！」

突然の事に驚き泣き叫ぶ、幼い少女。

「次はお前が、死にたいのか？」

そう言うと男は、ニヤニヤと笑いながら少女の胸に銃口を向ける。

少女は訳が分からないままぽかんと口を開け、男を見上げた。

…狂ってる。

啞然としながら男を見詰めていると、拳銃の引き金は迷うことなくあっさりと引かれた。

悲鳴を上げる間もなく、真っ赤な血液を大量に流しながら少女が倒れる。

恐らく何もわからないまま命を絶たれたであろう、幼い少女…。

「行くぞっ！」

そう言うと、死神がまた鎌を振り上げる。

今度は少し小さな光る球体が、少女の身体から飛び出した。

そしてその瞬間、また俺の心に迷いが生じた。

「24時間以内なら、戻れるんだろっ！？」

俺は思わず、死神に向かって叫んでいた。

その間も、その球体は倒れている母親の周りをつろつろと彷徨っている。

「今更、何を言っやがるっ!？」

お前の時と違っ、この子は死ぬ運命にあるんだぞっ!？」

ここで命を助けたところで、結局は生じた歪を修正するため、運命が動き出す。

…どの道こいつは、助からないんだっ!?!？」

死神が、絞り出すような声で叫んだ。

「もういい、私がやるっ!」

そう言っ彼女は俺から網を奪っただけれど、その時には既に手遅れで…。

「ちっ!遅かつたか…。」

死神が、小さく吐き捨てるように呟いた。

幼い少女の魂は先程までの明るい光を失い、黒く、鈍い光を放ち始めていた…。

第二話 決められた運命？

「…何なんだ、一体!？」

先程までとは姿を変えた幼い少女の魂を、俺はただ呆然と見詰めた。それは禍々しい空気を纏い、すごい勢いで空中を飛び回っている。しかもその魂は、少しずつだが大きくなっているようだった。

「お前のせいだぞ。…厄介な事になった。」

彼女は静かに、でもかなり不機嫌な様子でそう呟いた。

…厄介な事？

そこで俺は彼女の言っていた言葉を、漸く思い出した。

『その魂は、悪霊になる。』

— 生成仏することも、再生されることもなく、現世を彷徨^{さまよ}う事になる。』

彼女の声が、頭の中で木霊した。

嘘だろうっ!？

俺がもたもたしていた所為で、あの小さな女の子は悪霊になってしまっただろうっ!？

成仏も出来ず、一生あのまま…。

そんなの、冗談じゃないっ!

自分の判断ミスの所為で起こった事態に、愕然とした。

『どんっ！』

そうしている間にも、また銃声が響き渡る。
次に撃たれたのは…あの男だった。

男は自殺ではなく、警官による発砲で命を落とした。

「…先に、あつちを片付ける。」

彼女は静かにそう言うと、鎌で男の首を斬り付けた。

男の身体からあの少女と同じ、黒く禍々しく光る球体が飛び出した。

「…やっぱり、性根しよっねが腐ってやがったか。」

死神は、忌々しそうに低く呟いた。

「行けっ！」

その言葉に反応し、俺は慌てて男の魂を追い掛けた。

すごいスピードで飛び回っていたそれは、衝撃とともに意外にもあつさり網に捕まった。

手で掴むとそれは予想外に硬く、冷たく、そして重かった。

…まるで鉄球のような、闇色の塊。

それをリュックに詰め込むと、死神の方を確認した。

「…やるじゃねえか。」

でも、ここからが正念場だっ！」

彼女はニヤリと、不敵に笑った。

「私があれば追い込むから、お前が網で捕まえる。

… 今度こそ、失敗すんなよ？」

そう言うと彼女は鎌を手にしたまま、ゆっくりと歩き出した。鎌を振るとその球体は、逃げるような動きを見せる。

死神に追い込まれ、どんどん逃げ場をなくしていく、黒い塊。

俺もゆっくりと、彼女に続いてその球体を追い詰める。

しかし次の瞬間、突然もわつと熱い空気が周辺に満ちた。

それは、幼い少女の魂から溢れ出ているようだった。

そしてその途端、実体ではないはずなのに俺の体は、異常なまでの疲労感に襲われた。

死神の方をちらりと見ると、彼女もやはり疲弊した表情を浮かべている。

「早くしないと、やべえな。

… アイツ、どんどん生気を吸って、巨大化してやがる。

… 行くぞっ！」

真っ青な顔でそう言うと、死神は黒い魂に鎌で斬りかかった。

逃げ場をなくした球体は、俺の方に向かって一直線に飛んできた。

今度は外せないっ！

必死で網を振ると、先程以上の衝撃と共に、漸くその塊を捕えることが出来た。

思わずへなへなど、その場に座り込んでしまう俺。

その後も俺はまだ肩で息をしていたが、死神は既に平静を取り戻しているようだった。

網に手を突っ込み、彼女は小さな黒い塊を取り出した。

「可哀想に…。」

辛かったし、怖かったよな？

でももう、安心していいよ。

私が、天国へ連れて行ってやるから…。」

それから彼女は幼い少女の魂に、優しくキスをした。

その瞬間、目を開けていられない程の閃光がその塊を包む。

漸く俺が目を開いた時、死神の掌には小さな光る球体がそっとのせられていた。

それから死神は、リュックの中にその魂を収めた。

「ぎりぎり間に合って、よかった…。」

あと少し遅かったら、こいつは悪霊になってた。」

そうやって彼女は、静かに優しく微笑んだ。

…筈だったんだけど次の瞬間、もの凄い形相でこちらを睨みつけた。

「てめえの所為でなっ！

ったく、次はきちんと言わなきゃぞっ！？」

そう言うと彼女はくると方向転換して、ゆっくりと歩き出した。

俺は慌てて彼女を追いかけ、来た時同様二人で自動ドアをすり抜けた。

歩きながら俺は、彼女に語りかけた。

「だって、あんな事になるとは思わなかったからさ。」

…ただあの女の子を、助けてやりたかったんだ。」

死神は、何も言わない。

「でもさあ、なんで間に合ったの？」

もう黒く光ってて、あんなに禍々しい空気を出していたのに…。」

俺が聞くと、彼女は無表情のまま答えた。

「…魂を、解放してやったから。」

もともとの綺麗な心がまだ残ってたから、助けることが出来た。本当に、ぎりぎりのところだったけどな。

…ああいう子供の魂が一番、性質たちが悪い。

無知が故ゆえ、自分が死んだ事にすら気がつかない。

そして純粹が故、愛しい者と離れることを拒否しようとする。

…だからすぐに捕まえないと、大変なことになるんだ。」

そう呟いた彼女は、やはりすごく悲しそうで…。

だから俺は、次からは迷わず死神の命令を聞こうと心に誓った。

…今日一日だけの助手だけれど、せめてその間だけでも彼女がそんな顔をしないで済むように。

第三話 死を司るもの？

俺達はもう10分位、ゆったりと歩き続けている。

そして気がつくのと彼女の背中からは、羽根が姿を消していた。だから俺は不思議に思い、死神に聞いてみた。

「今度は飛んで行かないの？」

「ああ。まだ次の死者が出るまで、2時間くらいあるからな。

あんまり早く着いても、退屈だろう？」

彼女は軽く伸びをしながら唇をへの字に曲げ、またしても面倒臭そうに答えた。

…黙ってたら、かなりの美少女なのにな。

思わず、そんなことを考えてしまう。

でも初めて会ったときから、偉そうな女だな、とは思っても、不思議と不快感はない。

いや寧ろ、時折彼女が見せる悲しそうな表情や優しい笑顔に、ちょっとドキドキしている自分がある。

…まあでもそんなことを言おうものなら、またしても恐ろしい形相で凄まれるであろうことは想像に難^{かた}くないんだけどさ。

そこまで考えて、ふと気付いた。

勝手に『彼女』と思っていたけれど、そもそもこの死神は本当に女なんだろうか？

頭に浮かんだ疑問をそのままぶつけてみる事にした俺は、彼女に聞

いた。

「…君ってさ、ホントに女なの？」

すると眉間に深い皺を寄せ、ぎろりと睨まれた。

「当たり前だろうがっ!？」

…中には人間界でいう、おかまやおなべと同じような存在もいるけど、基本的には男女の種別ははっきりしている。」

なるほどね。

でもそこで、また別の疑問が湧いてきた。

「死神は、いつから死神をやってるの？」

それと死神っていうの、呼びにくいんだけど、名前はないわけ？」

「…よく喋る男だな。まあいい。

私は生まれた時から死神だ。

そしてそれから7年間ずっと、この仕事をやってる。

あと、私の名前は『サラ』だ。

…しかしそんなことを人間に聞かれたのは、初めてだな。」

「えっ、そうなの？」

俺が聞くと、彼女は色々思い出そうとするように、空を見上げた。

「…ああ。

私の事が見える奴がいても、普通の人間は死神に名前を聞いたりするしないだろう？」

…お前は、変わっているな。」

そう言うと彼女はまた、ふん、と鼻で笑った。

…そうか、俺って、変わってるのか。
確かに死神なんてモノに出逢ったら、普通の人間は恐怖に恐れ慄く
だろう。

貴方の名前は何ですか、なんて聞く奴、殆どいないだろうなあ…。

「じゃあサラは 生まれた時から死神なんだよね？」

それから7年、ってことは、サラ。…まだ7歳なのっ!？」

辿り着いた答えにぎよっとして、声が裏返った。

すると彼女は頗る嫌そうな顔で、言った。

「人間と違い、死神に『何歳』とかいう概念はねえよ。

それに経験値だとかこれまで学んできた事を考えると、私がお前に劣っているなんて事はあり得ない。

…それよりお前、さっき私のことを『サラ』と呼んだなっ!？」

名前を呼ぶなら、『サラ様』と呼べっ!」

「いいじゃん、サラで。

俺の方が、9歳も年上なんだし?」

サラの表情が、みるみる怒りで変化する。

さすが死神、この世のものとは思えない形相で俺を睨んでいる…。
でもそれも何だか見慣れてきたので、それすらも可愛いな、なんて
思っている自分が恐ろしい。

これ以上、何を言っても無駄と判断したのだろう。

「…もういい。好きにしろっ!」

サラはそう叫ぶと、ふわりと灰色の羽根を広げた。

「あっ!待ってよ、サラっ!」

慌てて俺も、ゆっくりと空中に舞い上がる。
さつきと違い緩やかなスピードで飛ぶ空は、とても気持ちがいい。

「俺の名前も、まだ言っていなかったよね？」

齋藤 英知えいちだよ！」

彼女に名前を呼んで貰いたくて、取り敢えず教えてみたんだけど。

「お前なんか、下僕1号で充分だっ！」

さらりと流されてしまった。

…まあこれも、想定内の範囲かな。

「生まれた時からって事は、サラも何かから生まれてきたんだよね？
最初はやっぱり、死神も赤ちゃんなわけ？」

俺が聞くと、彼女は静かに首を横に振った。

「生まれた時から、って表現は、不適切だったかもな。
存在に気がついたときから、とでも言うべきか…。

…私は7年前からずっと、この姿のままだ。」

そう言うとサラは、少し寂しそうに微笑んだ。

…こういう表情の彼女は、正直あまり見たくない。

「そうなんだ…。」

それだけ言うと俺は、もうそれ以上何も聞けなくなっていました。

第三話 死を司るもの？（後書き）

ジャンルを恋愛からファンタジーに移行しましたが、でもまだ迷っている為、再度移動させるかもです。

第三話 死を司るもの？

気まずい雰囲気の中、当てもなく空を彷徨う二人。
すると突然、今度は彼女が聞いた。

「…なあ。なんでお前は、自殺なんかしようとしたんだ？
彼女は心底不思議そうに、首を傾げた。

「私はいつもこんな仕事をしてるから、よく分からないんだ…。
普通人間ってのは、死を恐れているものだろう？
なのに時々、その死をわざわざ自分から受け入れようとする奴が
現れる。」

「…それが私には、分からないんだ。」

静かにそう言った彼女の表情からは、いつもの不機嫌で傲慢な態度
は見えてとれない。

本当に疑問に思ったことを、ただ口にしただけなのだろう。

そこで俺は素直に思うまま、俺が自殺に至った理由を口にした。
話を聞き終えると、彼女はポツリと、とても寂しそうに呟いた。

「やっぱり、理解出来ないな…。」

死神には感情なんてもん、ねえから…。」

彼女は本当に、自分に感情がないと思っっているのだろうか？
今見せている悲しげな表情も、さっき少女の魂を助けたときの優し
い表情も、どちらも偽物なんかではないように思えるのに…。
なんだか切なくなつて、空を飛びながら俺は彼女を抱きしめた。

「てめえ、何しやがるっ!？」

彼女は驚いて突き飛ばそうとしたが、死神とはいえ力では男の俺の方が有利なようだ。

構わず腕の力を強め、さらにギュッとサラを包み込む。

「サラはこれでも、何も感じない？」

耳元で囁くと、彼女は少し困った様に微笑み、言った。

「…うまく言えないけど、お前に抱き締められると、なんだかモヤモヤしたものが溶けてなくなるみたいな感じがする。

それに胸の辺りが、ぽかぽか暖かいみてえだ。

…これが、感情っていうものなのか？」

第四話 長い旅路？

暫く二人で空に浮かんだまま抱き合っていたが、突然彼女はすりと、俺の腕から離れた。

「…そろそろ時間だな。」

サラは、何事もなかったかのように言った。
俺はちよつと名残惜しいような気もしたが、次の仕事が待っているというなら仕方がない。

「ちゃんとして来いよっ！」

そう言う彼女は、灰色の翼を羽ばたかせた。

先程よりは時間的に余裕があるのか、サラはふわふわと飛んでいく程なく目的地に到着したのか、彼女は地面に足をつけた。

「まあ今度の奴は、簡単だと思っぞ。」

…なんせ死神が迎えに来るのをずっと、待ってたような婆さんだからな。」

そう言う彼女は、不愉快そうに唇をへの字に曲げた。

「…ずっと、待ってた？」

疑問に思い、俺は彼女の言葉を繰り返した。

「爺さんに先立たれて、13年。」

同居する長男の嫁の嫌がらせに耐えながら、ひっそりと生きてき

たみたいだからな。

…しかも4年前からずっと、寝たきりらしい。
最近は何という年寄りが多くて助かるよ。」

そう言っただけをひそめた彼女は、ひどく戸惑っている様に見える。

「まあでも、楽な仕事ならいいじゃない？」

俺はそれに気付かない振りをして、わざとへらへらと笑って見せた。

「…そうだな。」

じゃあ、そろそろ行くぞ。」

そう言うと彼女は目の前の古い一軒家に向かって歩き出し、先程と同じようにドアを開けることなく通り抜けた。

するりと中へ消えていったサラを追って俺も、無言のまま中へ入る。ゆっくりと羽根を羽ばたかせながら、2階へ向かう階段を飛んで行く彼女。

階段を昇りきるとそこには、小さな和室の入口があった。
襖を開けずに通り抜け、中へ入る彼女に俺も続く。

室内には布団が敷いてあり、年老いた女性が目を開けたまま寝転んでいた。

その姿に得も言われぬ思いを抱き、じっと見つめる俺とサラ。

するとその時、ゆっくりと女性はこちらを向いた。

「やっと迎えに来てくれたんだねえ、待ってましたよ…。」
そしてその老婆は、にっこりと静かに微笑んだ。

「…見えるんですか？」
俺が聞くと、女性はまた静かに微笑む。

「…死ぬのをずっと待っていた人間に死期が近付くと、稀に私達の事が見えるようになる。」
サラは無表情に、そう告げた。

「ありがとうね。」

…お爺さんのところへ、連れて行ってってくれるんでしょう？」
老女は、とても嬉しそうに聞いた。
俺はその姿を見て、何だか居た堪れない気持ちになった。

隣にいるサラの方を見るとやはり、辛そうな顔をしている。
今にも泣き出しそうなその表情に、またしても胸を締め付けられた。

「…ああ。覚悟はできてるんだな？」

死神は、絞り出すような声で聞いた。
女性は無言のまま、コクリと頷いた。

第四話 長い旅路？

「…まだ時間まであと、10分ほどある。」

その間で、何かやり残したことはないか？」

サラが、小さな声で聞いた。

「そうねえ…。」

なくなつた主人に、線香の一本でもあげてやりたいけど、この体じゃ無理なものね？」

老人は、残念そうに答えた。

するとサラはそつと、この老婆の頬に両手を触れた。

「これで、少しの間は動けるだろう。」

…好きにするがいい。」

静かな口調で呟くようにそう言うと、サラは眉間に皺を寄せた。ゆっくりと上体を起こし、また嬉しそうに笑う女性。

「あら、まあ！

本当に、夢を見てるみたいだわ！。

でもこれで死ぬ前に、お爺さんに挨拶が出来る。

今から逝きます、ってね。本当に、ありがとう…。」

そして彼女は多少ふらふらしながらではあつたが立ち上がり、和室の片隅の、小さな仏壇の前に正座した。

「長い間待たせたわねえ、お爺さん…。」

漸く私も、あなたの処へ逝けるのよ…。」

線香に火をつけ、両手をあわせた老女の頬を、涙がすつと伝っていた。

それからゆっくりと、彼女はこちらを振り返った。

「本当はね、何度も死のうと思ったのよ？」

でもね、そんな事したら、あの人の処に行けなくなってしまっ
てしょう？

だから今日お迎えに来てくれて、私は本当に嬉しいの！

…これでやっとまた、あなたに逢えるのね。」

そう小さく呟くと、老婆はまるで恋する少女のように頬を染めて微
笑んだ。

「…そろそろ時間だ。いくぞ？」

サラはそう言うと、スカルのチャームに手を触れた。
老女は無言のまま、その瞳を閉じた。

「本当に、ありがとう…。」

小さな声でそう言った瞬間、死神の鎌が彼女の首に斬り掛かった。
すぐに彼女の体からは、ゆっくりと、光る球体が飛び出す。

しかしそれは今日見た他の魂とは違い、ふわふわと飛び回ることも、
逃げ回るような真似もせず。

…ただじつと、捕まえてくれるのを待っているかの様だった。

網とリュックを俺に手渡すと、サラは静かに呟いた。

「これで、いいんだよな…。」

俺は、その球体を網に捕らえ、それからゆっくりと手に掴んだ。
…それはとても柔らかくて、そしてとても温かな魂だった。

「…うん、そうだね。」

天国でこれからはお爺さんと一緒に、幸せに暮らしていけるに決まってる。

サラが彼女に、幸福を与えてあげたんだよ…？」

俺がそう答えると、サラは静かに視線を逸らした。

第五話 彼女が眠る、その側で…？

次に俺の方を見た時には、サラはいつもの不機嫌そうな表情に戻っていた。

そして彼女はまた、ふわふわと空に舞い上がった。だから俺も、慌ててそのあとに続いた。

「さて。次の仕事まで、あと4時間か…。

結構、時間が空くなあ…。

私は少し仮眠をとるけど、お前は どうする？」
腕をうぐんと伸ばしながら、サラは俺に聞いた。

死神も、眠るんだ…。

俺はその事実に関分驚きながらも、その間どうするかを考えた。気がつくところには、二人が最初に出会った、高校の屋上だった。相変わらずそこには俺の肉体が、間抜け面で寝転んでいる。

…なんか、不思議な感覚だな。

校庭の時計を見ると、今は夕方の5時過ぎだった。

4時間後、ということとは、次の仕事は夜の9時頃か…。

「サラの側に、いてもいい？」

今更することなんて、何もなし…。」

俺がそう答えると、サラはまたふん、と鼻で笑った。

「つまらねえ男だな。」

まあ、いい。好きにしる。

じゃあ私は今からちよっと寝るから、絶対に起こすなよ?」

そう言うと彼女は、リュックから真つ黒な寝袋のようなものを取り出した。

…本当にこのリュックは、一体どうなっているんだろう?

青い色をした、未来から来たネコ型ロボットのポケットみたいに、四次元空間に繋がってるのか?

そんなことを考えていると、彼女は取り出したそれを屋上の地面にポンと放り投げ、もぞもぞと、小柄なその体を寝袋の中に慣れた様子で収めていった。

かわいい寝顔が見れるかな、なんて思っていた俺は、ちよっと残念に思いながらも、その様子を眺めていた。

ちよこんと入口から覗いた彼女の顔が、俺に告げる。

「じゃあ私は、3時間程したら起きるから。」

…その間、本当に好きにしていいぞ?」

それからその小さな入口は、器用にも内側から閉じられた。

そしてその直後から、小さな寝息が聞こえ始めた。

余程彼女は、疲れていたんだろうか?

こんなに速攻で眠れるだなんて、まるで小さな子供みたいだな…。

「おやすみ、サラ…。」

もう聞こえていないだろうとは思ってたけれど、俺はその寝袋をそつと撫で、囁いた。
せめて眠っている間だけでも、彼女が幸せな夢を見れるといいなあ、
と思いつながら。

その後ぼんやりと、屋上から下界を覗き込んだ。

そして俺は、今日一日の間に起きた、不思議な出来事について考えた。

第五話 彼女が眠る、その側で…？

そもそも突発的な行動とはいえ、自殺しようなどと考えなければ、サラと出逢うことはなかっただろう。

最初に逢った時、彼女は自分のエリアで死ぬのは面倒だからやめろ、と言った。

でも今思うと、彼女は自殺なんかを考えていた俺の事が、許せなかったんだろう。

たくさんの人間の死に、泣くのを堪えて一人で必死に向かってきた彼女だったから…。

…本当に、サラは素直じゃないな。

今日彼女が見せてくれた、たくさん表情を思い出してみる。

不機嫌そうに歪められた、唇。

悪戯っ子みたいにニヤリと笑う、不敵な表情。

幼い魂に向けられた、優しい笑顔。

ぎろりと俺のことを睨む、恐ろしい形相。

そして悲しそうに俯く、幼い子供のような顔…。

我知らず、心臓がとくん、とくんと脈打つのをを感じる。

彼女に出会ってまだ、4時間と少し。

急速に蝕まれてるな、と思う。

…彼女への、恋心に。

死にたかった気持ちはもう、全くといっていい程残ってはいない。
いや寧ろ、あの時の俺を叱ってやりたいくらいだ。

自殺なんて真似をしたらきつと、彼女が悲しむに決まっているから
…。

が、しかし…。

24時間が過ぎた時俺は、本当に彼女と別れることが出来るのだろ
うか…？

ぼんやりとそんな事を考えながら、俺も彼女の眠る横に寝転がり、
静かに目を閉じた。

第六話 歪んだ愛情？

隣で何かがごそごそと動く気配を感じて、俺は眼を覚ました。

…幽体離脱中でも、眠れるんだ。

寝ぼけながらもそんなどうでもいい事を考えていたら、いきなりガバッと寝袋ごとサラが起き上がった。

「サラっ!？」

ぎょっとして、思わず彼女の方を覗き込む。

「大丈夫…?」

反応が全く無いので不安になり、声を掛けたら寝袋のチャックがゆっくりと開いた。

「ん〜、よく寝た」

彼女は大きく伸びをしながら、寝袋から上半身を出した。その様は、やっぱり死神というより天使みたいに可愛い。

「なんだ、お前も寝てたのか？」

サラは俺の方をみて、にっこりと微笑んだ。

寝起きは、頗る良いみたいだな。

…いつもこんなだったら、最高なのに。

時計を見ると、時刻は夜の八時を廻っている。
その為、辺りはもう真っ暗だ。

「ちょうど3時間、つてとこだな。

さて、そろそろ起きるか。」

そう言った彼女は、いつもの仏頂面に戻っていた。

「次の仕事は…。

なんか、面倒くさそうな奴だな。

関係を愛人の嫁にばらそうとして、男に刺される女、か…。」

昼ドラみたいなのその内容に俺は、ぎょっとした。

「さつくり捕まえられたらいいんだが、この世に未練を残されて、
悪霊にでもなられたら厄介だな。」

彼女の言葉を聞き、最初の現場で見た、幼い少女の魂を思い出した。

「そうなる前に捕まえねえといけないから、お前も心してかかれよ
？」

そう言うとサラは、俺の瞳を覗き込んだ。

その瞬間、俺の心臓はどきんと跳ね上がった。

…ホント、心臓に悪い。

そして彼女は、羽根を広げてふわりと空中に浮かび上がった。
その様子はやはり酷く幻想的で、俺の胸を締め付ける。

…彼女は人間ではなく、死神で。
俺は彼女と共に生きていくことは出来ないのだと、誰かに言われて
いるような気がして…。

そんな心中を彼女に気づかれぬ様に、表情を消した。
そしてサラに置いて行かれない様、俺も夜空に舞い上がった。

ふわふわと空を飛んで行く、俺とサラ。

「まるで、ピーターパンとウェンディーみたいだ。」
俺が思わずそう呟くと、彼女は不思議そうに聞いた。

「なんだ、それ？」

「永遠に年を取らない少年と、普通の人間の女の子の物語だよ。」
俺が答えると、彼女はふーん、とだけ口にした。
…それからサラは可笑しそうに笑い、言ったんだ。

「まるで私と、お前みたいだな。
永遠に年を取らない死神と、普通の人間のお前。
…で、最後は一体どうなるんだ？」

彼女はまた、不思議そうにそう聞いたのだけれど。

永遠に年を取らない少年は、ネバーランドへ。
普通の人間の女の子は、元の世界へ。

それは、俺と彼女の行く末を物語っている様で…。

「忘れちゃったよ…。」

俺は咄嗟に、彼女に嘘をついた。

「なんだよ、それっ！？すっげえ気になるじゃねえかっ！」

サラはムツとした表情で尚もブツブツと文句を言っていたけど、俺はそれ以上彼女に何も言えなかった。

暫くすると諦めたのか、彼女も何も喋らなくなった。

第六話 歪んだ愛情？

暫く無言で空を飛んでいたけれど、彼女は突然地上に舞い降りた。

「…ここだな。」

そう言うとサラは、高層マンションを見上げた。

またふわりと羽根を広げ、彼女は飛んでいく。

一階、二階、三階…。

どんどん上昇していく彼女。

漸く彼女が止まったのは、12階に到着した時だった。

右から3番目の部屋の前で、サラはこちらをゆっくりと振り返った。

「…入るぞ？」

そう言うと、彼女はその部屋の窓をすり抜けた。

俺も慌てて、それに続く。

そこでは24、5歳とみられる美しい女性と、40代後半と思われる、小太りの男が修羅場を繰り広げていた。

「…私、別れないわよ？」

どうしても別れたいって言うなら、私、奥さんに全部話すから。」

ソファアに腰を掛けて、クスクスと妖艶な笑みを浮かべ、女は言った。

…茶色の長い髪を自らの指に巻きつかせながら、悠然と。

「じよ、冗談じゃないっ！」

蒼子、今まで充分いい思いさせてやっただろっつ！？
金かつ、まだ金が必要なのかっ！？」

立っている男の方は、顔面蒼白だ。

普通ならここで、勝負あり、というところか。

「お金、ねえ…。」

でもそれだけじゃ、ねえ？」

彼女はゆっくりと立ち上がり、男の首に両腕を回した。

「…何が、望みだ？」

男が低く、凄むように聞く。

「望み、ねえ。」

さつきも言ったでしょう？

…奥さんと、別れて。」

女は甘く強請るような声で、男に告げた。

「それで、お前がその後釜に収まるつもりか？

…でもお前はただ、金が欲しいだけなんだろう？」

男が、イライラしたように聞いた。

女は、馬鹿にしたように笑った。

「そろそろだな…。」

サラが小さな声で、呟いた。

その時男が女の腕を振り払い、ゆらりと動いた。

ふらふらとした足取りで、そのまま台所へ向かう。

…戻ってきた男の手には、銀色に光る包丁が握られていた。

「お前なんかの為に、全部を捨てられるわけがないだろうっ！？」
そう叫ぶと男は、女の胸をズブリと刺した。

その瞬間、女が満足気に微笑んだ。

そして彼女は、うつとりとした表情で告げた。

「これで貴方の心は、私だけのもの。

…永遠に、ね。」

尚も笑みを湛えたまま、女は続ける。

「…私は、本…当に、貴方のこと…を。」

最期まで言い終わる前に、女は瞳を閉じた。

そしてそのまま二人は、リビングに倒れ込んだ。

男は放心状態のまま、まだ天井を見上げている。

俺は茫然としながら、二人の姿を見詰めていた。

女は、金目当てなんかじゃなく。

…ただ純粹に、彼の心が欲しかっただけだったのだ。

その代償として、自分の命を差し出す事になっても…。

その愛が、とても歪んだものだったとしても…。

サラも同様に、二人から目が離せないようだった。

しかし先に平常心を取り戻したのは、サラの方だった。

彼女はそっと、胸元のスカルのチャームを握った。

死神の鎌に形を変えたそれで、サラは女の首元目掛けて斬りかかる。

その瞬間だった。

…ゆつたりとソファアに腰を掛け、不自然なまでに美しい男が言ったのは。

「…ねえ。その女、俺の獲物なんだよねえ。

…勝手に手、出さないで貰えるかな？」

年齢的には、20代中盤、といったところか？

真っ黒なスーツに、真っ黒なシャツ。

靴も靴下も、その男が身に付けるものすべてが真っ黒だった。

こんな奴、ここにはいなかったよなっ！？

いつの間に部屋に、入ってきたんだっ！？

吃驚してサラの方を振り返ると、彼女は真っ青な顔をしていた。

「…貴様。この女と契約してやがったのかっ！？」

彼女は苦々しげに眉間に皺を寄せ、不機嫌そうに男に問う。

男はにつこりと微笑み、答えた。

「御名答。そういうわけだから、手を引いてくれるかな。

…かわいい死神さん？」

それから男は、ゆつくりと大きな羽根を広げた。

サラのものとは違う、禍々しい漆黒の羽根を…。

第七話 死を喰らうもの？

「…もし、嫌だと言ったら？」

サラは小さな、でも強い意思をもった声で聞いた。

ほお、と言つと男は瞳を細め、サラの方を値踏みするようにじっと見詰めた。

「…お前、普通の死神じゃないのか。

成程ね。ここら辺は、あの男の担当エリアだったか…。」

「貴様、何を言つてやがるっ！？それに、あの男つてのは…。

まさか、リユーキのことかつ！？」

死神の瞳が、大きく見開かれる。

「やっぱりな。アイツの部下なら、あり得ない話でもないか。

…普通の死神が、絶対に持ちえないモノを持つた死神がいても。」

そう言つと男は、クスクスと可笑しそうに笑つた。

この男、本当に一体何を言っているんだ…？

普通の死神が、絶対に持ちえないモノ…？

そして『リユーキ』ってというのは、誰のことなんだ？

「…それに、おかしなペットを飼っているようだしね？」

そう言つと、男の視線がこちらを向いた。

「…ペットなんかじゃない。私の、助手だっ！」

死神が、不愉快そうに男を睨みつけた。

男はふわりと宙に舞うと、サラの眼前まで移動した。そして無言のまま、彼女の頬に手を触れた。

それまでただ呆然と様子を見ていたが、そこで俺は漸く我に返った。俺もふわりと舞い上がり、男とサラのところまで移動する。

「…やめろ、サラに触るなっ！」

そう言っつて男の手を払いのけると、男の顔が少し不機嫌そうに変化した。

「…貴様、人間の分際で俺に齒向かうつもりか？」
男のテノールが、部屋に響いた。

「…サラを、傷つけるって言うのなら。
お前が何者であっても、俺は全力で立ち向かうっ！」

すると男は、可笑しくて堪らないとでもいう様に、プツ、と吹き出した。

「君達、ホント面白いなあ！」

君達の魂も、一緒にここで狩ってやってもいいんだけど。

でも俺、君達の事、ちよっと気にいっちゃったよ！

…だから、取引しない？」

男はまた、穏やかな笑みを浮かべて言った。

「取引…？」

サラが、訝るように聞く。

「そうだよ。悪い内容じゃないと、思うんだけど…。」

俺は、その女の魂を貰う。

君達は、ただそれを黙って見過ごしてくれるだけでいい。

そもそもその女は、既に俺と契約済みだから、違反にはならないだろう?」

サラは目を瞑り、何かを必死に考えているようだった。

それから少しして、漸く彼女は口を開いた。

「…いいだろう。」

どの道一級悪魔のお前には、私の能力では敵いそうにねえからな…。

そうすれば、私達には手出しはしないんだろう?」

一級悪魔だつてっ!?

この男、人間でも死神でもないとは思っていたけれど、今度は悪魔の登場か…。

言われてみれば、彼の様子は穏やかだったが、酷く冷酷な感じがした。

笑っていても、その美しい瞳の奥は常に凍りついたままだった。

男は満足そうに、ニヤリと笑った。

「…ああ。約束しよう。」

そう言うと男はスーツのポケットに手を入れ、何か短い棒のようなものを取り出した。

その先には、長くて黒い、ロープのようなものが付いている。

…これは、鞭?

俺がそう考えた瞬間、男の鞭が死んだ女の腹部目掛けて放たれる。

『バシッ！』

鈍い音とともに、女の身体から球体が飛び出した。

それは今日見た明るい光を放つ塊でも、黒く禍々しい塊でもなく。

…赤く鈍く光る、まるで人間の血液の様な、球体。

それを素手で簡単に捕えると、男は恍惚とした表情を浮かべた。

「…欲にまみれた人間の魂は、本当に美味そうだな。」

俺はかなり吃驚して、男の方を見た。

「…まさか、食うつもりなのか！？人間の、魂をつ！？」

男は特に驚いた素振りも見せず、俺の方を向く。

「…そうだよ？だって俺は、悪魔だからね？」

そこのかわいい死神さんみたいに、神の命令で魂を狩るわけじゃない。

…君のご主人様は、それを理解した上で俺にこの魂を譲ってくれたんだろっ？」

そう言うと、ちらりとサラの方を見た。

彼女はまた目を瞑り、言葉を選ぶように答えた。

「…ああ。それしか方法が、なかったからな。」

それに女はコイツと既に契約済みだったから、仕方ねえ。」

男は満足気に、頷いてみせた。

「じゃあそろそろ俺は、行くとするかな？

あっ、そうだ！俺の名前は、シユウ。

二人とも、覚えておいてね！」

彼は魂と鞭をポケットに入れると、ふわりと舞いあがった。

…そして次の瞬間、悪魔の姿は部屋から消えていた。

第七話 死を喰らうもの？

死神は悔しそうに唇を噛んで、俯いたままだ。
俺は彼女の態度に納得がいかず、聞いた。

「…なんでアイツの言いなりになんか、なったんだ？」

「リユーキが…」

私の上司が昔、一級悪魔とひとつの魂を奪い合った挙句、死神と悪魔、双方ともに相当酷いダメージを負ったと聞いている。

それから神と魔王は、協定を結んだんだ。

悪魔が死神より先に契約を結んでいた場合、その魂は悪魔のものとしてもいい。

ただし死神が勝負を挑み、その戦いに勝利した場合、その魂は死神が得ることが出来る。

…逆に悪魔が勝利した場合、悪魔はその死神を狩る権利を得られる、つてな。」

それから彼女はとても不機嫌な様子で、眉間に深い皺を刻んだまま言った。

「さつきも言ったが、私の能力ではアイツにはどの道敵わなかった。あの男は恐らくリユーキが昔戦って、互角だったっていうヤツだろっつ。」

リユーキは死神の中でも、超一流といわれるエリートだ。

…まあ、ふざけた性格の野郎だけだな。

私もお前もあのまま逆らったところで、アイツの言っていた通り、魂を狩られてお終いだっつた…」

助けられる見込みもねえつてのに、自らの意思で魂を悪魔に差し出したヤツのために、犬死するなんてごめんだからな…。」

…じゃあ、助けられる見込みがあったら？

そんな疑問が俺の頭に浮かんだけれど、それは彼女には聞かず、俺の心に留めておいた。

聞いたところで彼女を苦しませるだけに、決まっているから…。

部屋では相変わらず、男が焦点の定まらない目で天井を見上げている。

「あの女の望みは、叶ったようだな。

これでアイツの心は、永遠にあの女のものだ…。」

彼女は小さく溜息を吐き、来た時同様部屋の窓をすうつ、と通り抜けた。

だから俺も、無言でその後続いた。

第八話 真夜中のデート？

「次は、約5時間後。深夜3時まで、仕事は休みだ。

また暫く、時間が空くな。…仮眠もとっちゃったし、どうする？」

歩きながら、サラは俺に聞いた。

「そうだなあ。…サラは、いつもはどうしてるの？」

普段のサラが知りたくて、今度は俺が聞いてみた。

「…うーん。いつもは飯を食ったり、買い物をしたり、かなあ？」
意外な返事に、俺はまた少し驚いた。

「って言っても、このままの姿でじゃないぞ？」

もちろん羽根は消して、実体化して、だが。

…お前も一緒に、来るか？」

「行くっ！」

俺は彼女の問いに、一も二もなく頷いた。

すると彼女はまた、ふん、と鼻で笑った。

「全く。他にすることねえのかよ？」

そう言いながらもちょっと彼女が嬉しそうに見えるのは、俺の自惚れだろうか？

「まるで、デートみたいだね？」

俺がそう言っと、彼女は不愉快そうに口を歪めた。

「退屈そうだから、連れて行ってやるだけだっ！
それ以上余計なことを言うなら、お前だけ置いてくぞっ!？」

俺はくすくすと笑って、それからごめんと謝った。

サラはまだぶつぶつ何か文句を言っていたけど、それは多分、ただの照れ隠しなんだろうな。

本当に、素直じゃないんだから…。

暫くすると、彼女は漸く機嫌が治ったのか、眉間に皺を寄せたままではあるものこう言った。

「ったく、仕様がねえなあ。

じゃ、連れてってやるから、これを飲め!」

それから彼女はリュックから小瓶を取り出し、その中に入っていた赤い小さなカプセル状の薬の様なものを俺の掌に乗せた。

「…何、これ？」

サラを信用していないわけではないけれど、余りにも怪しげなその薬の様なものに、少し警戒する。

「実体化する為の薬だ。…嫌なら、いいんだぞ？」

ニヤリと笑いながら羽根を消し、彼女は俺に渡したものと同じそれを自分の口に入れた。

するとその瞬間、彼女の足元に、黒い影が現れる。

これが、実体化する、ということか…。

俺も、自分の掌の上にある薬をごくりと飲み込む。

その瞬間、軽い眩暈に襲われたが、なんとかかすぐに持ち直した。

俺の足元にも、彼女同様、先程まではなかった黒い影が現れる。

「戻るときは、こっちの薬を飲めばOKだから。」
そう言うと彼女は、またリュックから違う小瓶を取り出した。
その中には、更に怪しげな、黒い小さなカプセルが入っていた。

「じゃ、行こうか？こっちでなんか美味しい店とか、あんのか？
金の事なら、心配するな！
特別に私が、奢ってやるから！」

それからサラは得意げに、胸をドン！と叩いた。
本当なら俺が彼女に御馳走してあげたかったけれど、今日の処は仕方がない。

「ありがとう、サラ。じゃ、美味しい洋食屋があるから、行こうか？」

俺がそう言うと、サラはキラキラと目を輝かせ、それから聞いた。

「その店には、ハンバーグはあるのっ！？」

…死神様は、ハンバーグがお気に入りらしい。

余りにも予想外のその言葉に、俺はまた吹き出しそうになったけど、なんとか我慢して言った。

「あるよ。とびきり美味しいやつが、ね？」
すると、彼女は嬉しそうに笑って言った。

「じゃあ今日は、そこで我慢しといてやるっ！だから、とつとと連れて行けっ！」

腕時計を見ると、時計の針は10時少し前をさしていた。

「まずい！閉店まで、時間がないっ！」

俺はそう言つと、彼女の手を取り、走り出した。

夜の街を、二人で手を繋ぎ疾走するサラと俺。

ただでさえ人目を引く彼女を連れての事なので、周囲の視線が集まる。

そして、改めて思う。

彼女は、やはりとても綺麗なのだ。

皆、走っていく俺たちを振り返る。

だから俺は、少し誇らしいような気持ちになった。

「間に合わなかったら、ただじゃおかねえぞっ!？」

彼女はあはあと息を切らせながら、それでも強い口調で言った。

「大丈夫っ！もう、すぐの処だからっ！」

それから程なく、目的の店の前に到着した。

店の名前は、『みつばち食堂』。

店先ではちょうど、奥さんが暖簾を片付けようとしているところだった。

「まだ、間に合いますか？」

息を切らせながら俺が聞くと、奥さんにはっこりと笑って言った。

「ええ、大丈夫ですよ。」

…ひよつとして貴方、斎藤さんちの英知君っ!？」
彼女は、とても嬉しそうに言った。

「…はい、そうです。御無沙汰してます。」
俺も、にっこりと笑って答えた。

「あら、まあ！
ホント、久しぶりねえ!…立派になって。
そちらは英知君の、彼女かしら?とつても可愛らしいお嬢さんね
?」

その言葉を聞き、俺とサラは思わず顔を見合わせた。
奥さんはその答えを待たずに、更に質問を続けた。

「いつ以来かしら?
最近家族でいらっしやらないから、主人も心配していたんですよ
?」
彼女は、にこにこしながら聞いた。

「…すみません。母が亡くなってからだから、3年ぶりかな。」
俺がそう言うと、奥さんはハツとした表情に変わった。

「ごめんなさい。私、知らなかったから…。」
申し訳なさそうに、彼女は言う。

「いいですよ。もう、ずいぶん前のことですし…。」
今度は逆に、こちらが申し訳ない気持ちでいっぱいになる。
…彼女には全く、悪気なんてものはなかったのだから。

「それよりも、とびきり美味しいハンバーグを二人前、お願いでき

ますか？」

俺はまた、笑顔で言った。

奥さんも同じように微笑んで、席へと案内してくれた。

席に着くと、奥さんはお水を運んできてくれた。

そして、暫くお待ちください、と言うと、店の奥へ戻っていった。

「前はよく、この店に来ていたのか？」

サラが、聞く。

「ああ。さつきも言ったけど、母さんが亡くなるまでは、家族皆でよく来ていたよ。」

「…このハンバーグは、本当に美味しいんだよ？」

そう言うのと、サラは嬉しそうに笑った。

3年前、母が心臓の病で亡くなるまでは、父と俺、そして母の三人で、幼い頃から休みの度にこの店を訪れていた。

母はサラと同じように、ハンバーグが大好きだった。

料理の上手な女性だったが、『ハンバーグは、ここのものが一番美味しいの！』と言って、嬉しそうに笑っていた。

懐かしい、子供の頃の思い出が蘇る。

あの頃は父に絶対の信頼を寄せ、彼のような立派な医者になるんだと思っ込んでいた。

母も事あるごとに、俺に父の偉大さを伝えた。

そんな時父はいつも、困ったように、照れくさそうに笑っていた。

幸せな、家族の風景。

…それが永遠に続くのだと、その頃の俺は信じて疑わなかった。

第八話 真夜中のデート？

「…どうしたんだ、お前？」

サラが、少し心配そうな表情で俺を覗き込んでいる。

「なんでもないよ。…少し昔の事を、思い出していただけ。」「
そうだけ言うと、俺は彼女に微笑んでみせた。」

彼女はなんだか納得していない様子だったが、奥さんがハンバーグとライス、それからカボチャのスープを運んでくるのが見えると、そちらに意識が完全に向いたのか、それ以上は何も聞かなかった。

「…いいにおいだな。本当に美味そうだ！」

彼女がそう言うと、奥さんはサラの言葉遣いに少しだけ驚いた様だったが、すぐに可笑しそうにクスリと笑った。

「においだけじゃなく、味も気に入ってくると嬉しいんだけど…。
このハンバーグ、うちの自慢のメニューなんですよ？」

「そっか。それは、楽しみだな。」

じゃ、暖かいうちに食おうぜっ！

いっただきまーす」

そう言うとサラは、ナイフとフォークを手を取った。

彼女がハンバーグにナイフを入れると、そこからじわっと肉汁が溢れ出る。

その隣には、キラキラ光る人参のグラッセと、フライドポテトが添えられている。

デミグラスソースのいいにおいが、俺の食欲を刺激した。

一口それを口に含むと、サラは嬉しそうに瞳を輝かせた。

「うつま！なんだよ、これっ!？」

マジでうめえじゃねえかつ!」

そう言いながら彼女は、どんどん口にフオークを運んでいく。

俺も彼女に続いて、ハンバーグを口に運ぶ。

その瞬間、とても懐かしい、幸せな味が口いっぱい広がった。

「…確かに、美味しいな。これ、こんなに美味かったっけ?」

俺も思わず、その味に目を見張る。

サラは、その細い身体の一体どこに収まるんだろっ?というくらいの勢いで、ペろりそれらを平らげた。

奥さんとご主人は店の奥から、クスクスと笑いながら、嬉しそうにその様子を見つめていた。

俺とサラは、ご主人と奥さんに軽く挨拶して、店を後にした。その時計の針は、もう夜の11時を指していた。

「やべえっ!もうこんな時間かつ!？」

「…事務所に行かなきゃ。」

サラが、慌てた様子で言った。

「今日中に報告しないといけねえから、私は行くぜっ!」

一時間程で、戻るからっ!後である、屋上で落ち合おうっ!」

…どうやら死神も、一般の会社員とさして変わらない生活を送っているらしい。

「…了解。」

俺がそう答えると、サラは小瓶から黒いカプセルを二つ取り出し、一つは俺の掌に、もう一つは彼女の掌に乗せた。

二人でぐくりと、同時にそれを飲み込む。

赤いカプセルを飲んだ時同様、軽い眩暈に襲われたが、なんとか持ち堪える事が出来た。

その瞬間さつきとは逆に、今度は俺達の足元から影が姿を消した。それからサラは灰色の羽根を広げると、夜空に舞いあがった。

「じゃあなっ！」

そう言っていると、彼女はかなり慌てた様子で闇夜に消えていった。

タイムリミットのある俺達には、その一時間もとても惜しい気がしたが、そんな事を言える立場に俺はない。

さて、これからどうするか…。

俺は、小さく溜息を吐いた。

第八話 真夜中のデート？（後書き）

第九話 変わるもの、変わらないもの？

時間に間に合うよう、サラは一人、必死で羽根を羽ばたかせる。漸く事務所に着いた彼女は、リュックから慌ててIDカードを取り出した。

事務所は東京都の上空にあるのだが、通常そこが人間の目に触れることはない。

サラがカードを機械にあてると、自動ドアがゆっくりと開いた。

「…ただいま。」

サラが言うと、何人かのスタッフが振り返った。

そしてその中の一人が、彼女に声を掛けた。

「おう、サラ！お疲れさん。」

にこやかに男はそう言うと、サラの頭をふわりと撫でた。

「子供扱いすんなって、いつも言ってるだろうがっ！？」

サラは男の手を、パシリと叩いて言った。

男の名前は、『リユーキ』。

言うまでもなく、彼もまた死神だ。

スラリと背の高いこの男の容姿は、美形揃いの死神の中でもずば抜けている。

艶やかな黒髪は、天使のようにふわふわとカールしている。

肌は、男性としてはかなり白い方だが、不健康な印象はない。

長い睫毛に縁どられた、黒く大きな瞳。

鼻はスツと高く、少し大きめだが形の良い唇は、ほんのり朱を帯びている。

黒のスーツを着て、中にはグレーのYシャツを着ているのだが、その胸元のボタンは3つほど開けられている。そして彼の首にもサラ同様、スカルのチャームのネックレスが掛けられていた。

「なんだ、サラ？

…えらく機嫌が、いいみたいじゃないか。」

先程の少女の態度を見たら、普通の者はそんなことを思わないだろう。

しかし少女と男の付き合いは、かなり長い。

その為、通常の間人間が。

…否、死神が見落としそうな、些細な変化にも気がついた。

「くっ！…機嫌良くなんか、ねえよっ！」

サラは答えながら、リユーキから目を逸らした。

機嫌がいい？

…この、私が？

サラは、自問した。

「まあ、いいや。

それより、今日も仕事は順調だったんだろう？」

男は、にこやかに聞いた。

「いや、それが…。

悪魔のヤツに邪魔されて、魂をひとつ、狩り損ねちゃった。」

サラは、苦々しげに答えた。

その瞬間、男の眉間に僅かだが皺が寄る。

「…ほお。悪魔に邪魔されて、ねえ…。」
男の雰囲気はさっきまでの穏やかなものから一変し、周囲の空気が凍りつきそうなくらい、冷たいものになる。

「相手が一級悪魔だった上に、相手の女と、契約してやがったんだっ！」
悔しそうにサラがそう言うと、男の表情はまたしても穏やかなものに戻った。

「…なんだ。なら、仕方ないじゃん。
でも、報告書はちゃんと出せよ？」
リユーキはまた、にこやかに笑いながら言った。

第九話 変わるもの、変わらないもの？

…相変わらず、喰えねえ男だ。

サラは、心の中で呟いた。

そう思いつつも、一応この男はサラの上司に当たる。しぶしぶながら報告書の作成に取り掛かるため、彼女は机に向かった。

「なんだ、サラ？今日は、えらく素直じゃないか…。」

リユーキが訝しげに、サラに声を掛けた。

いつものサラなら文句をぶつぶつ言うものだから、皆であの手この手で宥め賺して、漸く作業に取り掛からせるというのに…。

「なんだよ、文句あるのかよっ!？」

サラが、不機嫌そうに言った。

確かに文句を言っているのなら注意のしようもあるが、真面目に作業していてそんな事を言われたら、納得がいく筈もない。

リユーキは苦笑いして、それからいつものように給湯室に向かった。

「今からコーヒーを淹れるんだけど、お前も飲むだろう？」

いつもなら、『糞不味いコーヒーだけど、我慢してやるか。』とか言いつつ、ちゃっかり御相伴に預かるサラだが、これも今日は違っていた。

「…いや。今日は急ぐから、いらねえ。」

大急ぎで報告書を仕上げたサラは、それをリューキの胸に押しつけた。

そしてにつこり微笑んで、『じゃあな!』と言うと、とても慌てた様子で駆け出した。

それを見た事務所内の死神たちは、吃驚した表情で皆、顔を見合わせる。

「…ああ。気をつけてな。」

リューキも茫然としながら、そんなサラを見送った。

…サラに一体、何があった？

あんな笑顔、此処に来てから本当に、初めてじゃないのかっ!?

しかしリューキはまた穏やかな笑みを浮かべ、考える。

…まあ、いい。これは、頗る良い傾向だ。

早くしないとサラも、俺と同じになってしまうから…。

「しかし娘を見守る父親ってのは、こういう気持なのかな？」

リューキがポツリと呟くと、彼の秘書はこう答えた。

「それは分かりませんが。…リューキさん、少しジジ臭いです。」

第十話 二人の時間？

俺はサラとの約束の時間まで、何をしようかと考えたが、特には何も浮かばなかった。

その為俺はのんびりと、空の散歩をすることにした。

夜空を一人で飛んでいると、何だかとても寂しい気持ちになった。

彼女はいつもこんなに静かな、真つ暗な闇の中、一人ぼっちで過ごしているのだろうか？

そう思うと、なんだかとても切ない気持ちになった。

ふわふわと飛びながら、約束の場所へ向かう。

そこには俺が、死んだ様に眠っていた。

俺はコツンと軽くその頭を蹴り、呟いた。

「…お前は一体、どうしたいんだ？」

当たり前だけれど、俺の身体は何も答ええない。

俺は小さく溜息をつき、空を見上げた。

この大都会の空には、殆ど星なんてものは見えない。

でも一つだけ、一際大きく輝く星が見える。

それは、サラみたいに眩しくて。

…そして彼女みたいに、少し寂しそうだった。

「よう、待たせたなっ！」

突然背後から、サラの声が聞こえた。

灰色の羽根を広げたまま、彼女は優しく微笑んでいる。

…こんなに穏やかな彼女の表情は、出逢ってから初めてだった。

「大丈夫だよ。サラはもう仕事、終わったの？」

俺も微笑んでそう答えたけど、何故か少しだけ泣きそうになった。

「ああ。報告書書かされたから、いつもよりちょっと時間が掛った。まっただけだな！」

悔しそうに、サラが綺麗な唇をへの字に歪める。

そんな表情も、今の俺にはとても愛らしく感じられた。

「なんか、まだ時間が余ってんな…。」

お前はどっか行きたいとこ、ねえのかよ？」

サラが、聞いた。

「…じゃあ、海がみたい。」

俺がそう言つと、サラは少しだけ寂しそうに笑った。

「海、な…。私はまだ、行ったことがねえ。」

「…え？」

俺は不思議に思い、思わず小さく声を上げた。

「海に関する死は、私の担当外だから…。」

他の仕事は、なんでも私に押しつけやがる癖にな。

…だから海には、行った事がねえんだ。」

眉間に皺を寄せて、サラは言った。

「じゃあ今から、一緒に行ってみない？」

俺が聞くと、彼女は一瞬戸惑った表情を浮かべ、それからコクリと頷いた。

そして俺達はまた、夜空に舞い上がった。

幼い頃俺の家族は、母親がとても好きだったこともあり、よく海に行った。

キラキラと輝く、水面。

無邪気に笑う、幼い頃の俺。

それを見て幸せそうに微笑む、父と母。

それは全て現実だったはずなのに、今となってはまるで、映画の中のワンシーンの様で…。

第十話 二人の時間？

漸く海に着くと、当り前の事だがそこはもう真つ暗だった。それでも暗闇の中、水面がキラキラと輝いて、とても綺麗だった。

「…これが、海。」

彼女は、うっとりとした表情でそう呟いた。

その様子はとても幻想的で、まるで一枚の絵画の様に美しかった。でもそれは、またしても俺の心を強く締めつけた。

そつと水面に手を触れると、サラは嬉しそうに笑った。

その顔は、今まで見た中で一番かわいくて、そして一番幼かった。

そんな彼女を見ながら俺は、神様はとても残酷だと思った。

彼女はこうして、『死神』なんだろう？

こんなに優しくして、こんなに純粋な子、他にはいないというのに…。

…ねえ、サラ。

君は本当に、一人で大丈夫なの？

これからもそうやって、平気な振りをして生きていくの？

…俺では君の、力にはなれないの？

俺の頭にはそんな言葉が浮かんだけど、それを口にする事は無かった。

したところで彼女はきつと、馬鹿にしたように笑ってこう言うに決

まってる。

『お前なんかに助けてもらおう必要、ねえよ。私を一体、誰だと思ってるんだ？』

それが本心であろうと、なかるうと。

彼女は今までずっと、そうやって生きてきたんだから…。

無意識のうちに小さく溜息を吐くと、サラが少し心配そうに俺の顔を覗き込んだ。

「おい、お前。…どうか、したのか？」

彼女が、聞いた。

俺は思わずまた、そんなサラを抱きしめた。

彼女もまた何も言わずに、俺の胸に顔を埋めた。

第十話 二人の時間？（後書き）

第十一話 天使？

暫くそうやってサラを抱きしめていたのだけれど、彼女が小さな声で呟いた。

「…もう、行かねえとな。次の、仕事の時間だ。」

それからサラは、俺から静かに離れた。

この時彼女は俯いたままだったので、その表情を窺い知る事が出来なかった。

その為なんだか少しだけ不安になり、顔を覗き込もうとしたら、サラは顔を逸らして言った。

「見るなっ！…頼むから今は、私を見ないでくれ。」

…その声は、とても悲しそうで。とても苦しそうで。

俺は何も言えなかったし、何も出来なかった。

彼女もそれ以上何も言わず、灰色の羽根を広げて夜空に舞い上がった。

どれくらいの間、そうしていたんだろう？

二人で空を無言で飛んでいると、突然彼女が止まった。

「…ここだな、次の死者が出るのは。」

そう言ったサラはいつものようにとても偉そうで、そしてとても不機嫌そうな表情に戻っていた。

到着した場所は、割と大きな一軒家の前だった。サラは無言のまま、家の玄関をすり抜ける。だから俺もそれに続き、中へと入った。

そこには6、7歳くらいの小さな少年と、彼の両親らしき人物がいた。

少年は幸せそうな顔で、眠っている。

男と女は、青ざめた顔でそれを見詰めていた。

サラが俺に、無表情のまま告げる。

「今からここで起きるのは、無理心中だ。

借金の所為で会社が倒産した男とその嫁が、家族を道連れに命を絶とうとする。

「…これから死ぬのは、二人だ。」

「…二人？三人じゃ、ないの？」

俺はその言葉を疑問に思い、聞いた。

「死ぬのは、二人だよ。

「…そのオヤジは自分の命が惜しくなって、死に損ないやがるからな。」

サラは苦々しげに、吐き捨てるように言った。

でも彼女はまたすぐに表情を消し、続けた。

「…よくある話だよ。

結局無理心中を起こした本人だけが、生き残るってのは…。」

「さあ、そろそろ始まる頃だぞっ！」

そう言うと彼女は俺に、網とリュックを手渡した。
そして彼女もスカルのチャームを、そつと握りしめた。
その瞬間、またそれは死神の鎌へと形を変えた。

女は部屋の隅に置いてあつた白いナイロン袋からロープを取り出すと、男に無言で手渡した。

男は無言で頷くと、それを手にしたまま健やかに眠る少年の横に静かに座った。

女はそつと少年の頭を撫でたが、彼は余程深く眠っているのか、微動だにしない。

次の瞬間、男は少年の首にロープを巻きつけ、それを一気に締め上げた。

少年は驚いたように一瞬だけ目を開けたが、そのまま小さな呻き声を上げたかと思うとまた、静かに瞳を閉じた。

第十一話 天使？

女は声を上げながら涙を流したが、男は真つ青な顔をしてはいたものの、表情の変化は全く感じられない。

「…次は、私の番ね。」

…裕君。ママもすぐに行くから、待っててね。」

女が泣きながら小さくそう呟くと、それを相図と受け取った男は女の首にロープをまわした。

男がいくぞ、と言うと、女はそつと目を閉じた。

次の瞬間、男はまたロープを締め上げる。

女は目を見開き、少年と同じ様に呻き声を上げたが、またすぐに静かになった。

サラは鎌を構え、最初に少年の、そして次に女の首に斬り掛かった。飛び出した二つの光る球体を俺は慌てて捕まえ、リュックへ閉じ込める。

それを見た彼女もまた、鎌を元の形に戻した。

しかし次の瞬間、予想外の出来事が起こった。

男が突然サラの方を、振り返ったのだ。

そして男は嬉しそうに笑い、彼女に言った。

「貴方は、天使なんだろう？」

…こいつらを、天国へ連れて行ってくれるんだね？」

「…てめえ、私が見えるのか？
ずっと死にたがってた人間とも、思えねえし…。
無駄に靈感が、強いつてタイプか？」

サラが、不敵な笑みを浮かべて言った。

「…サラ？」

不敵な笑みなら、昨日から何度も見ている。

でもその様子がなんだか彼女らしくないように思えた俺は、思わず声を掛けた。

しかし彼女はこちらを振り向く事なく、ふわりと羽根を広げて空中へと舞い上がった。

そしてそのまま男の側まで移動すると、彼の頬に手を触れて、にっこりと微笑んだ。

「…お前には、私が天使に見えるのか？」

彼女は、男の耳元で囁いた。

…俺が聞いた事のない程、優しい声で。

…そう言った瞬間の彼女はまるで、本物の天使みだった。

サラ？

本当に、どうしたんだ？

俺が唾然としながら二人の姿を見詰めていると、男がまた嬉しそうに笑った。

「ありがとうございますっ！俺はこいつらのことが、心配で、心配で…。」

しかし、次の瞬間、男は言葉を失った。

…サラの表情が、先程までの天使みたいな優しいものではなく、とても冷たいものに変わっていたから。

その表情はぞくりとするほど美しく、そしてそれと同時にぞくりとする程恐ろしいものだった。

「ふざけるなっ！」

貴様の都合で二人の命を絶っておいて、今更何言ってやがるっ！？

…私は、死神だ。こいつらの魂は、貰ってく…。」

そう叫ぶとサラはニヤリと笑い、呆然とする男を尻目にくるりと踵を返し、家から飛び出して行った。

俺は慌てて、彼女を追った。

部屋からは、男の大きな悲鳴が聞こえてきたけれど、そんな事に構ってられるかっ！

俺は彼女の事がとても心配で、必死で追い掛けた。

「…サラ？」

俺が声を掛けると、彼女は飛ぶのをやめ、ゆっくりとこちらを振り返った。

…その表情はあの悲しくて堪らない時の、幼い子供の様なものだった。

「私の事、アイツ、天使だと思ったんだっさ。」

…馬鹿みたいだよな？」

そう言っつてサラは小さく笑ったんだけど、その顔はまるで泣いてるみたいだった。

俺は何か彼女に言わなくちゃと思ったんだけど、何も言えなくて。

するとサラは、すぐにいつもの仏頂面に戻ってしまった。

泣きたい時は、泣いてもいいのに…。

「…ごめん。」

俺は、彼女に謝罪の言葉を述べた。

…初めて逢った時、俺は彼女になんて残酷な事を言っただろう？

『やっぱり、天使なのかつ！？』

思わず口をついて出たその言葉は、どれくらい彼女を傷つけたんだろう？

彼女は俺の謝罪の意味が分からないらしく、不思議そうに首を傾げている。

でも俺は、そんな事を言っただ自分が許せなくて。

…もう一度、小さな声で呟くように言った。

「…本当に、ごめん。」

…サラは天使なんかよりずっと優しく、ずっと素敵だよ。」

俺は心からそう言ったのだけど、彼女は心底嫌そうに眉間に皺を寄せ、言った。

「何言つてんだよ、お前？」

「…私は、死神だぞ？お前、ホント馬鹿じゃねえの？」

それからサラはまたゆっくりと灰色の羽根を広げ、真っ暗な闇の中
舞い上がった。

第十二話 夜明け前？

「…次の仕事は、8時過ぎか。」

長い闘病生活の末の死だから、そんなに手間取る事はねえだろう。

「

夜空をふわふわと飛びながら、サラは言った。

「さて、と。これから、どうする？」

また4時間ほど、時間が空いちまうけど…。

何かしてえ事とか、ねえか？」

彼女は俺の顔を覗き込み、聞いた。

「特には、ないよ。サラは？」

俺が聞くと、サラはニヤリと笑った。

そして地上に足をつけ、背中^の羽根を消してから言った。

「あるっ！私は腹が、減っちゃった。

だから、何か食おうぜっ！」

彼女はまたリュックの中から例の小瓶を出して、そこから赤いカプセル上の薬を2粒、取り出した。

無言で俺にそのうちの一粒を渡すと、残ったそれを彼女は口に放り込んだ。

俺も彼女同様、その真っ赤なカプセルをごくろりと飲み込む。

すると二人の足元に再び、影が現れる。

「じゃ、行くか？でもこの時間にあいてる店なんて、かなり限られてるけどな。」

彼女は少し、残念そうに言った。

サラは死神だけれど、食に関してかなり貪欲な方みたいだ。まあでも、ハンバーグをあんなに喜んで食べてたんだから、当然と言えば当然か…。

俺はあの時のサラのあまりにも嬉しそうな表情を思い出して、思わずクスリと笑ってしまった。

サラはそんな俺を見て、訝しげに眉を顰^{ひそ}めて言った。

「…なんだよ、お前。」

「ニヤニヤしゃがって。気持ちわりい野郎だなっ！」

そう言っていると彼女はまた、ふん、と鼻で笑った。

それから俺達は、24時間営業のファミレスに二人で向かった。明け方の4時だというのに、店内には2組ほどの客がいた。席に着くとサラは、とても嬉しそうにメニューを広げた。

「何がいいかなあ？」

「サンドイッチもいいけど、ホットケーキも捨てがたいな…。」

真剣な表情で、メニューと睨めっこをする彼女。

こんな様子は本当に、普通の女の子みたいで。

ここにいる奴らはきつと、彼女が死神だなんて、考えもしないんだ

ろくな…。

そんな事をぼんやりと考えていたら、彼女は大きな声で言った。

「決まったっ！私はこの、ホットケーキセットにするぞっ！」

それからサラはまた、嬉しそうに笑った。

メニューを俺に手渡すと、彼女はさっさと決めろよ、と言った。

…ホント、我儘なんだから。

俺はちよつと苦笑して、それから言った。

「じゃあ俺はこの、サンドイッチとコーヒーのセットにするよ。

これなら半分ずつ交換したら、両方とも食べられるだろうっ？」

その言葉を聞くとサラは、キラキラと目を輝かせた。

そして彼女は、笑顔でこう言ったんだ。

「そっか！そんな手が、あつたんだなあ…。

他人と一緒に飯を食う機会なんかねえから、全く気が付かなかつたぜっ！」

何気なく言った彼女の言葉に、俺の胸は痛んだ。

…そっか。

彼女はいつも、一人ぼっちなんだ。

食事をする時も、眠る時も。

…そして、あんな仕事をしている時でさえも…。

俺がそんな事を考えていると、彼女は心配そうに言った。

「もし嫌だったら、お前の好きなもの頼んでいいんだぞ？」

「違うよ、サラっ！」

「俺も両方食べたかったから、丁度いいよ。」
俺が笑顔でそう言っていると、彼女はまた幸せそうに笑った。

それから俺達は、他愛もない話をしながら食事が出てくるのを待った。

彼女は死神の仕事の大変なところとか、上司についての愚痴を話した。

俺は学校の事や友人の事、好きな本や映画について話した。

彼女は本というものにとっても興味を持ったらしく、今度買いに行ってみる、と言って笑った。

食事が運ばれてくると、またしても彼女は嬉しくて堪らない、という様な表情を浮かべた。

「折角だし、温かいうちにさっさと食おうぜっ！」

「頂きま〜すっ！」

彼女は両手を合わせてそう言っていると、ナイフとフォークでホットケーキを半分に切り分けた。

「じゃあこれが、お前の分な」

それから彼女は半分を取り皿に移し、そして残りの半分にバターとメープルシロップをたっぷりとかけた。

第十二話 夜明け前？

一口分ずつ切りとっては、彼女は嬉々とした様子でそれを口に運ぶ。

「このホットケーキ、初めて食ったけど、ファミレスの癖に割といけるなあ…。」

サラは、うっとりとした表情で言った。

俺もサンドイッチを手に取り、一口だけ齧る^{かじ}。

この店のそれは過去に食べたことがあったけれど、彼女と一緒に食べると、なんだかとても美味しく感じられた。

「人と一緒に食べると、特別美味しくなるんだよ。」
俺が言うと、彼女はそんなもんかなあ、と首を傾げた。

軽い食事を済ませた後も、俺達は時間が許す限りのんびりと会話を楽しんだ。

サラは出逢った時とは違い、様々な表情を見せてくれた。

俺はそんな彼女がただ愛おしくて、可愛くて。

彼女の笑顔がもっと見たくて、たくさんくだらないことを話した。
お前、馬鹿だろう？と言われながらも、彼女が笑ってくれるととても嬉しかった。

彼女がふと、窓の外に目をやった。

「…そろそろ、夜が明ける。」

もうちょっとで、次の仕事の時間だな。」

そう言ったサラは無表情で、何を考えているのか全く分からなかつ

た。

「…お前はまだ、死にてえとか考えてるのか？」
サラは真剣な表情で俺の目を見詰め、聞いた。

「…いや。今日一日、色々な人の死を見てきて、考えが変わったよ。
俺はもう、死にたいとは思ってない。」

そう言うと彼女は、とてもホツとしたような顔で微笑んだ。
でもすぐにまた不機嫌そうな表情に変わり、言った。

「ま、私のエリア外でやるんなら、私はどっちでもいいんだけどな
！」

そしてサラは、ニヤリと笑った。

…ホント、素直じゃないんだから。

本当は誰かが自殺なんかで命を絶つことが、悲しくて仕方ない癖に。

いいや、それだけじゃないな。

誰かが死ぬこと自体、本当はとても辛くて堪らない癖に。

…彼女はそれがばれるのが怖くて、嘘の言葉で武装してるんだ。

それから暫く、無言の時間が過ぎた。

「…でも、約束の時間までは付き合っよ。」
俺がそう言うと、サラは一瞬嬉しそうに笑ったんだけど、すぐにまた仏頂面に戻り、言った。

「仕方ねえな、お供させてやるかっ！
じゃ、そろそろ行くっぜ？」

それから彼女は、ゆっくりと席を立った。

時計の針は、朝の7時を指している。
外はもう、すっかり明るくなっていた。

第十三話 約束？

店の外に出ると、俺達は再び黒いカプセルを飲み込んだ。

「じゃ、行くか？」

次の死は、さっきも言った通り、長い闘病生活の後の死だ。

だから多分、本人も死期が分かっているとと思うから、抵抗などはない筈だ。」

静かにそう言うと、サラはまたふわりと灰色の羽根を広げ、舞い上がった。

俺もそれに続き、空に浮かぶ。

ふわふわと空を飛んで行くと、着いたその先は、嫌ってという程見覚えのある病院の前だった。

「サラ。…ここ、俺の父さんが働いてる病院だ。」

俺は、小さな声で言った。

するとサラは、心配そうな表情で聞いた。

「…お前は行くの、やめとくか？」

でも俺は、首を横に振った。

「…いいや。」

そろそろ、父との関係に決着をつける、いい機会かもしれない。」

俺がそう言うと、彼女は一瞬驚いた様に瞳を見開いたものの、また無表情に変わり、ただ頷いた。

ゆっくりと自動ドアをすり抜け、中に入るサラ。
俺も無言のまま、それに続く。

「まだ少し、時間がある。」

親父さんの顔でも覗いていくか？」

サラはニヤリと笑い、言った。

俺が頷くと彼女は、じゃあ案内しろよ、と言って、俺の方を向いた。
彼女なりに気を使ってくれているんだろうと思うと、なんだか可笑しかった。

最近はこちらに来ることは全くと言っていい程ないけれど、小さな頃は度々訪れていた為、記憶ははつきりしていた。

俺は静かに宙に舞い上がり、ゆっくりと階段の上を飛んで行った。
彼女も何も言わず、それに続く。

父の部屋の前に着くと、俺は軽く深呼吸をして、それから中へ入った。

中では父が、何やら看護師の女性と話をしている最中だった。

「…斎藤先生。少し、休まれた方がいいんじゃないですか？」
彼女は心配そうに、父に向かって言った。

「うーん、でももう少し。調べたいことがあるんだ。」
父は、少し笑って答えた。

「でも、根の詰めすぎはよくないですよ？」

いくら今度の患者さんが、あの時と同じ病気だからって…。」

それを聞いた父の表情が、少し硬くなった気がした。

「別に、その所為だけじゃないさ。
ただ、あんな小さな子が命を落とすかもしれないと思うと、じっ
としていられないだけだよ。」

「…先生、ホントに変わらないですね。
奥様が亡くなられた時は、本当にどうなる事かと思いましたけど。
だって斎藤先生、本当に家族思いでいらっしゃるから。」
そう言つと、女性は静かに微笑んだ。

「…昔の事さ。今じゃ息子は、俺と口を聞こうともしない。」
それから父は、少し寂しそうに笑った。

「まあでも、こんなに仕事に入れ込むのは、妻との約束があるから
かもしれないな。」

「…妻はね、自分の死に際に立ち会う事よりも、少しでも多くの人
を助けることを考えろつて、いつも言っていたから。」
父は、今度は楽しそうに笑った。

「妻はね、本当に素晴らしい女性だったんだよ。」

「…自分には、勿体ないくらいね。」
そう言つと父は、とても幸せそうに微笑んだ。

「きつと、奥様もお幸せだったんでしょね。」

斎藤先生の事、本当に自慢に思つてらっしゃったと思いますよ？
看護師さんが笑つて言つと、父はそうだといいけど、と恥ずかしそ
うに首を傾げた。

それから父は、静かに言った。

「確かに栄太君は、妻が亡くなった時に俺が執刀していた患者さんと、同じ箇所には腫瘍がある。」

だから少し、俺は力が入りすぎてたのかもしれない。

でも、決してその所為だけじゃないよ？

俺は、どの患者さんに対しても、全力で向き合ってる。

それが妻との、約束だからね？」

… 一体彼らは、何を言っているんだ？

母さんが、自分の死に立ち会う事よりも、人を助けることを優先しろって言っただなんて…。

どんな患者さんとも、全力で向き合うこと。

それが二人の、約束だなんて…。

俺は何か、重大な間違いをしていたっていつのか？

俺が啞然としていると、サラは微笑んで静かに言った。

「… いい親父さんと、いいお袋さんじゃないか。」

お前は本当に、幸せ者だな？」

俺は何も言えず、ただ俯いた。

第十三話 約束？

「…さてと、そろそろ行くか？

次の仕事の、時間だっ！」

サラはニヤリと笑い、宙に浮かび上がった。俺も黙って、それに続いた。

ふわふわとサラは飛び続け、漸く彼女が止まったのは5階の、『杉浦 亜美』と書かれた個室の前だった。

中に入ると、12、3歳と思われる少女が、苦しそうに胸を押さえ、ベットすいまくまに蹲すまっていた。

「コイツは生まれた時から、心臓に疾患があっただんだけさ。

だから他の奴らみたいに、馬鹿みたいに大声で騒ぐ事も、走り回る事も出来なかつたらしい。

でもこの子は、必死に生きてきたそうさ。…笑顔を絶やすこと無く、な。

…世の中ってのは、ホント不公平だよな？」

サラはほんの少しだけ眉間に皺を寄せてそう言ったのだけれど、その後はまたすぐに表情を消してしまった。

「…そろそろ時間だ。行くぞ？」

無表情のままそう言うと、サラは胸元のスカルのチャームに手をやった。

するとチャームは、また死神の鎌に姿を変える。

それからサラは、何も言わずに俺に網とリュックを手渡した。

無言のまま、少女の首元に斬りかかるサラ。

次の瞬間、少女の肉体からキラキラと、眩い位に輝く球体が飛び出した。

しかしそれは逃げ回るような素振りは見せず、今日出逢った老婆の魂の様に、ただじっと捕まえてくれるのを待っているかの様だった。俺はそつと、少女の魂を網で捕らえた。

…それはとても暖かくて、そして本当に綺麗な魂だった。

リュックの中にその魂を片付けると俺は、サラに聞いた。

「…これで彼女は、楽になれたのかな？」
俺が聞くとサラは、少し俯いて答えた。

「…それは、分からない。でもこの子は間違いなく、天国に行ける。
…だからまたきつと、近いうちに再生される。」

その言葉を聞き、俺は少しほっとした。

「今度は健康な体で、幸せな人生を送れるといいな…。」
俺がそう言つと、サラは少しだけ微笑んだ。

第十四話 タイムリミット？

「次の仕事は、朝の10時過ぎ。
交通事故だから、ちよつと面倒かもしれねえな……。」

夜空をふわふわと飛びながら、サラはいつも以上に深く眉間に皺を寄せ、心底嫌そうに言った。

「…面倒？」

俺はその理由が分からず、彼女に聞き返す。

「…ああ。事故死つてのは、一瞬の出来事だ。

だから死んだことに気が付かず、そのまま悪霊化することも稀^{まれ}じやねえからな。」

険しい表情で、彼女は答えた。

「中途半端に、時間が空いちまったなあ……。お前は、どっしするっ。」
彼女は俺の顔を覗き込み、聞いた。

「俺は特に、希望はないよ。…でも、そうだな。

サラと、一緒にいたい。…サラと、話をしたい。」

俺は彼女の綺麗な瞳を見詰め、言った。

彼女はその瞬間、少し悲しそうな表情に変わった。

でもまたすぐにいつもの様にニヤリと不敵な笑みを浮かべ、言った。

「お前もホント、物好きな野郎だな。

でもまあ、死神と話をする機会なんて、生きてる間は滅多にねえ

「からな！」

そして俺達は近くの公園に向かい、ベンチに腰を下ろした。まだ時間が早かった為か、公園には他に誰もいなかった。

「ねえ、サラ…。」

俺、さっきも言ったんだけど、小さい頃はずっと、父さんみたいな医者になりたってたんだ。

でもね、サラ。

母さんの死に際にすら姿を見せなかった父さんを、俺はずっと恨んでいた。

だけど今日の父の姿を見て、思ったんだ。

…俺はやっぱり彼みたいなの、立派な医師になりたいって。」

サラは嬉しそうに笑い、言ってくれた。

「そつだな。お前なら、きつとなれるさ！」

お前がもし立派な医者になってくれたら、私達死神の仕事も、ちよつとは楽になるかも知れないしな！」

それを聞いて、俺も微笑んだ。

「しかしお前、今日一日でホント、変わったよな？」

最初会った時はやる気も糞も無くて、生きてんだか死んでんだか分かんないような奴だったのに。」

そう言うとサラは、可笑しそうに笑った。

「…俺より、サラの方が余程変わったと思うけど。」

最初はずっと仏頂面で、何考えてんのか全然分かんなかったのにな？」

今度は俺が、クスクスと笑った。
その言葉に彼女はまた、不機嫌そうに唇を歪める。
そんな仕草も今の俺には、本当に可愛らしく見えた。

「…ねえ、サラ。今度自分の肉体に戻ったら、君とはもう逢えないのかな？」

俺がそう聞くとサラは俯き、ただじつと彼女の足元を見詰めた。
それから彼女は、小さな声で。

…そう、本当に小さな声で、言ったんだ。

「…ああ、そうだな。」

通常私達死神が生きている人間と会うには、様々な手続きと決まり事がある。

それはとても面倒で複雑だし、許可が下りる事はまずあり得ない。
…だからもう、お前とは逢えない。」

彼女の言葉は当然と言えば当然だったし、想像出来ていた事だった。
でももしかしたら、と少し期待もしていた俺は、かなりショックを受けた。

それからサラは顔を上げ、俺の方を見てニヤリと笑った。

「私の話、他の奴にはすんなよ？」

そんなことでペナルティー食らうのは真っ平だし、その前にお前、絶対おかしくなったって思われるしな？

さて、そろそろ行くこうか？

…次の仕事が、待ってるからな！」

サラはそう言うとき大きく伸びをして、それから灰色の翼を広げた。

第十四話 タイムリミット？

サラが空に舞い上がったので、俺も慌てて彼女を追う。

俺の腕時計の針は、9時43分を指している。

…タイムリミットまで、あと約3時間しか残っていなかった。

サラと出逢って、俺は夢を取り戻す事が出来た。

でもそれと同じくらい、譲れない思いがある事に俺はもう気が付いている。

…俺はもう、彼女の側を離れたくない。

「ところでさ、素朴な疑問なんだけど。」

俺は本心を悟られることの無いよう、注意しながらサラに声を掛けた。

「なんだ？」

サラはちよつとだけ微笑み、聞いた。

「肉体と精神が離れて、24時間が過ぎたらもう元には戻れないんだよな？」

俺も少し笑顔を浮かべ、言った。

「…ああ。それがどうしたんだ？」

サラの眉間に、訝しげに皺が寄せられる。

「ねえ、サラ。万が一、戻れなかった場合の事なんだけどさあ。
…俺も他の魂同様、悪霊とかつていうヤツになっちゃうわけ？」
あくまでもただの興味本位とでもいう様に、俺はへらへらと笑いな
がら聞いた。

「…いいや。お前の場合、まだ寿命が残ってるからそうはならない。
ただ、肉体には戻れない。それだけだ。」

彼女の言葉に、俺は安堵した。

それなら彼女の側で、永遠に魂だけで生きていく事も出来るという
ことだな…。

本当はそんな事を考えていたんだけど、またしても表面上は全く興
味なさそうな振りを続け、言った。

「ふうん。そうなんだあ…。」

彼女もそれを聞いて安堵したのか、ニヤリと笑い、言った。

「ああ！

まあでも、そんなもんになっても何も面白い事なんかねえから、
そんな物好きなヤツ、いねえと思うけどなっ！」

俺はそれを聞いて、ただ曖昧に笑った。

ゆっくりと空を飛びながら、二人で次の死の現場へと向かう。

その場所は、先程の公園からはさほど離れていなかった為、すぐに
到着した。

「さっきも言った通り、これから起こるのは交通事故だ。

まず、前の引越し屋の車が荷崩れを起こし、段ボールが落下する。
そしてそれを避けようとして、その真後ろのトラックが反対車線

に飛び出す。

その運転手が、一人目の死者だ。

二人目は、そのトラックと衝突する、黒い乗用車の助手席の女。
そろそろ、始まるぞ。

…さっきも言ったけど、気を引き締めて掛かれよ？」

そう言うとサラは、俺の方に鋭い視線を向けた。

第十五話 サラの涙？

…それは本当に、一瞬の出来事だった。

サラがそう言った次の瞬間、引越し屋の車から落下した段ボールを避けようとした一台のトラックが、スリップを起こした。

そしてそのトラックは、そのまま反対車線へと突っ込み、ガードレールに激突した。

更に、そのトラックに対向車が衝突する。

その後も何台かの車が玉突き事故を起こしたけれど、それは幸い大事には至らなかつたようだった。

「…行くぞ。」

サラはそう言うと、またスカルのチャームにそつと手を伸ばした。

チャームは一瞬のうちに、死神の鎌へと姿を変える。

それからまた俺にリュックと網を手渡すと、彼女はトラックに向かって駆け出した。

俺もまた、それに続いて走り出した。

トラックは恐ろしい程に変形していて、事故の凄惨さを物語っていた。

彼女が死神の鎌を太陽に翳すと、その瞬間車は半透明に変わった。それから彼女は、運転席に座る男の首元目掛け、鎌を振り上げた。すると男の身体から、光る球体が凄まじいスピードで飛び出してきた。

「急げっ！早くしないと、捕まえ損なうぞっ!？」

サラが、苛々した様子で叫んだ。

俺は必死でその光る塊を追いかけ、何度か網を振り回したところで漸く一つ目の魂を回収する事に成功した。

「次行くぞっ！モタモタすんじゃねえぞっ！？」
彼女はそう言うと、再び走り出した。

こちらの黒い乗用車は、トラックとほぼ正面から衝突した様に見えるけれど、助手席側だけが原型を失っていた。

サラが再び鎌を太陽に翳すと、この車も半透明へと姿を変える。

車内では、運転席の男が泣きながら、必死に助手席の血塗れの女に向かつて声を掛けていた。

「目を開けるよ、愛っ！今から一緒に、式場を見に行くんだろっ！？」

俺が一人で勝手に全部決めたら、後から絶対怒るんだろうっ！？

…頼むから、ふざけてないで目を開けてくれよっ！！！！」

男の悲痛な叫びが、辺りへと木霊する。

俺が啞然としていると、サラは小さな声で呟いた。

「…行くぞ。早くしないと、彼女は悪霊になっちゃう。」

そう言った彼女は、今にも泣き出しそうな表情をしていた。

サラは鎌を振り上げ、彼女の首元へと斬りかかった。

その瞬間、眩いばかりに輝きながら球体が女性の身体から飛び出した。

俺はまた必死で網を振り回したが、それはこれまでに無い位のスピードで運転席の周りを飛び回った。

「これから結婚する予定だったあの男の側を、どうしても離れたくないらしい。

…でも、このままじゃ駄目だ。

アイツを悪霊にしたくなかったら、さっさと捕まえろっ！」

サラは真っ青な顔で、絞り出すような声で言った。

俺は必死でまた網で女性の魂を追い掛けたんだけど、それはどんどんスピードを増していったので、なかなか捕える事が出来ない。

…そしてその光る球体は、そうしている間にもどんどん輝きを失い、代わりに禍々しい黒い光を発し始めた。

第十五話 サラの涙？

「…やべえな。さっさとしろよっ！」

サラがかなり慌てた様子で、俺に向かって叫ぶように言った。それから彼女は鎌を振り上げて、最初の死の現場でしたのと同じ様に、その黒くなり始めた球体を追い込んでいった。

俺も彼女の動きに合わせて、少しずつその球体を追い詰める。

しかしその塊は、轟音を上げながら凄まじいスピードで飛び回った。

…あっという間に巨大化していく、禍々しい漆黒の丸い塊。

その間にも、俺と彼女はどんどん生気を奪われ、体力を失っていく。そして次の瞬間、それは球体から真っ黒な闇へと姿を変え、サラの方に向かって襲いかかった。

「…くっ。てめえ、いい加減にしやがれっ！」

そんな姿になってまで側に居て、あの男が喜ぶとでも思ってるのかよっ！？」

サラが大声で叫ぶと、その不明瞭な輪郭の物体は少し怯んだように動きを弱めた。

その瞬間、サラが再び鎌を振り上げた。

…追い込むためではなく、その黒い闇を破壊する為に。

彼女の鎌の直撃を受けた真っ黒な闇は、一瞬にして粉々に砕け散った。

そしてそれは、あっという間に塵となり、姿を消した。

「…だから、事故死つてのは嫌なんだ。

彼女の魂を、天国へ送ってやる事が出来なかった…。」

サラはそう言うと、静かに涙を流した。

初めて見る彼女の涙に、強く胸を締めつけられた。

俺は何も言う事が出来なくて、ただ彼女を抱き締めた。

彼女はまた、大人しく俺の胸に顔を埋めた。

それからサラは、子供みたいに声を上げて泣いた。

…一人では泣く事すら出来ず、ただ必死に多くの死と向き合ってきた彼女。

それはきつと、これからも永遠に続いていく地獄。

…俺は本当にこの子を置いて、普通の生活に戻るなんて真似、出来るんだらうか？

暫くすると、漸く泣きやんだ彼女が顔を上げ、恥ずかしそうに言った。

「…悪かったな。みつともねえとこ、見せちまって。」

俺は彼女の頭を、優しく撫でながら言った。

「泣くのは別に、恥ずかしい事じゃないよ？

…泣きたいときは、泣いた方がいい。」

それを聞いたサラは、少し困ったように笑った。
それから彼女は俺から身体を離し、静かに言った。

「次の死まで、時間がない。…もう、行かねえとな。
…今度で、最後だ。心して掛かれよ？」

それから彼女は、いつもの様にニヤリと笑った。
時計を見ると、その針は11時32分を指していた。

…次で、最後。

彼女との時間も、残り後一時間半ほどになっていた。

第十六話 最後の仕事？

「次の仕事の現場は、ここからちよつと遠いな。」

…少し、飛ばすぞ？」

そう言うとサラは、また羽根を広げた。

輝く太陽の光を浴びた彼女は、本当に天使みたいに見えた。

でももちろん、そんな事は口には出来なかった。

…言ったところでまた、彼女を苦しめるだけだと分かっていたから。

俺もふわりと舞い上がり、彼女と一緒に空を飛ぶ。

…二人、無言で手を繋いだまま。

最初の時同様、スピードを上げて飛んでいく中、俺は考えた。

俺が本当にしたい事は、俺の夢は、一体どっちなんだろう？

父みたいなの、医者になる事？

…それとも彼女を支える為、魂だけになっても永遠の時を生きっていく事？

すると突然、サラが急停止して言った。

「着いたぞ？湿気た面、してんじゃねえよっ！」

それからサラは、不敵な笑みを浮かべた。

そして彼女は、俺の手をそつと離した。

「…次の死は、多分比較的簡単なものになると思う。
老衰で死ぬ予定の、爺さんだから。」

と言つても、昨日の婆さんと違つて、特別死にたがつてた野郎で
もないみてえだが。

今朝まではホント、元気だったみたいだし、それこそぼっくり死
ぬつてやつだな。」

そう言つとサラは、地上に向かつて急降下し始めた。

だから俺も、慌てて彼女に続く。

降りた先は、大きくも無ければ小さくも無い、本当に普通の一軒家
だった。

「じゃ、行こうぜ?」

そう言つと彼女は、するりと玄関を通り抜けた。

小さく頷いてから、俺も彼女の後に続いた。

彼の部屋は、一階の一番奥の洋室だった。

その老人は、ベットの所で静かに眠っていた。

「…これからこの爺さんは、突然心臓発作を起こして死ぬ。」

一瞬の事だけど、元々心臓は少し弱かったみたいだから、そんな
に抵抗はねえ筈だ。」

それだけ言つと彼女は、また表情を消した。

次の瞬間、老人は突然呻き声を上げ、心臓を押さえてもがき始めた。
しかしすぐに彼は、動かなくなつた。

…その表情は、安らかなものだった。

サラはそれを見て、安心したように少しだけ微笑んだ。それから胸元のチャームを、両手で握り締めた。

その瞬間、スカルスのチャームは死神の鎌に形を変えていく。無言で俺にリュックと網を渡すと、彼女は老人の首元に斬りかかった。

老人の身体から飛び出したのは、優しく光る球体だった。

それはふわふわと身体の周りを飛んでいたけれど、俺が網を振るうと大人しくその中に収まった。

手に持ったそれは、とても柔らかく、そしてとても暖かった。

俺が彼の魂をリュックの中に収めると、サラはにっこりと微笑んで言った。

「…ありがとな。これで、お終いだ！」

俺は何も言えず、ただ俯いて自分の足元を見詰めた。

第十六話 最後の仕事？

二人で来た時同様、玄関のドアを通り抜ける。
それからサラは、小さな声で言った。

「そろそろ、時間だな…。」

俺の腕時計の針は、もうすぐ昼の13時を指す。
俺と彼女が最初に出会った時間は、すぐそこまで迫っていた。

「…サラ。」

もし俺が、自分の身体に戻りたくないって言ったらどうする？」

すると彼女は、ギョツとした顔でこちらを見た。

「…なんだ、冗談か？」

死ぬ気はなくなったって、言っただらろう？」
訝しげな表情で、サラは聞いた。

「確かに、死ぬ気はなくなっただよ？」

でも、24時間精神と肉体が離れたままなら、肉体にはもう戻れなくなるんだよね？」

俺はもう、君と離れたくないんだ。だから…。」

俺が決死の思いでそう告げると、サラの表情は苦しげなものに変わった。

「…お前は一体、何を言ってるんだ？」

泣きそうな顔で、サラが聞いた。

俺は我慢できなくなつて、思わず彼女を抱きしめた。

「俺は、サラのことが好きなんだよっ！」

この先サラと離れて生きていくなんて真似、今の俺にはもつ出来ないよ…。」

「…だから、何言ってるんだよっ!？」

私は…、死神だぞっ!？」

彼女はとても苦しそうに、絞り出すような声で言った。そして彼女の瞳から、またたくさんの涙が零れ落ちた。

「…そんな事、知ってる。」

俺も色々考えたんだけど、やっぱりサラと離れてなんて、生きていけないよ。

君の事を、守りたいんだ…。」

…暫く無言のまま、抱き合っていたんだけど。

「…本当に、いいのか？」

彼女が、小さな声で聞いた。

俺は、無言で頷いた。

サラは再びふわりと羽を広げ、空に舞い上がった。

「…分かったよ。」

じゃあ、お前の体に、最後の別れを告げに行こう?」

そう言うとサラは、にっこりと微笑んだ。

俺は彼女が同意してくれて、本当に嬉しかったんだ。

そして、あまりに嬉しくて、俺は気付いてやる事が出来なかった。

…彼女のあの、悲しすぎる決意を。

第十七話 接吻

「…ありがとう。」

俺の身体のある学校の屋上に辿り着くと、彼女は小さな声で、静かに言った。

俺はいまいちその意味が分からなかったけれど、彼女とともに過ごす決意をしたことに対するものだろうと、勝手に解釈した。

「じゃあなっ！」

そう言うと彼女は、俺の身体を本体の方にどんっ！と突き飛ばした。その瞬間、俺の精神は、吸い込まれるように身体と一体化していくのを感じた。

…そして俺は、意識を手放した。

気がつくと、彼女が心配そうに覗き込んでいた。俺の精神と肉体は、完全に元に戻ったようだった。

「大丈夫そうだな？」

それからサラは、ニヤリと笑った。

「サラっ！俺は、本気で…。」

俺が言いかけた途端、彼女は穏やかな笑みを浮かべ、告げた。

「…分かってる。」

お前は本気で私のことを、好きになってくれたんだろう？」

それからサラはまた、静かに微笑んだ。

「私もお前と、ずっと一緒にいたかったよ？」

…でもそれ以上に、私は大きな夢を抱いてしまったんだ。」

「…夢？」

「そうだ。」

私は死神だから、夢を追いかける事も、人間として生きる事も出来ない。

…でも、お前は違っただろう？」

彼女は、続ける。

「私は、夢を見てしまったんだ。」

医者になって、多くの人の命を救う事…。

大切な人と、幸せな家庭を築く事…。

お前が代わりに、その夢を叶えてくれないか？」

そしてまた、彼女はふわりと笑った。

俺はそれ以上、何も言えなくて…。

「…いつかお前が死んだら、色々な話聞かせてくれよな？」

サラは、泣いてるのか笑ってるのか、分からないような表情で言った。

そこで俺は、漸く口を開いた。

「精一杯、生き抜いて。」

…そして俺が死ぬ時がきたら、サラが迎えに来てくれる？」

「そうだなあ…。その為には、死後契約が必要だけどな？」

エリア外でお前がぼっくり逝っちまったら、どうしようもねえからなあ…。」

「…死後契約？」

俺が聞き返した瞬間、俺の唇は彼女の唇で塞がれた。

「…これで、契約成立だっ！」

それまで精々、頑張って生きるよ？」

そう言っただけでサラは、いつものようにニヤリと笑った。

「私もお前に負けない様、頑張るよ！」

じゃあな、英知。…また、逢おう！」

灰色の羽根をふわりと広げると、彼女はまた俺の唇に軽くキスをした。

「…これは、契約の為じゃねえからな？」

少し頬を染めて、優しく微笑んで。

それから彼女は、大空に舞い上がった。

「じゃあね、サラっ！また、逢おうっ！」

俺が空に向かって大声で叫ぶと、彼女は無言で手を振った。

サラの姿が、どんどん見えなくなっていく。

そこで俺は、ふとある事に気がついて、クスクスと笑った。

「俺の名前、覚えてたんじゃないか…。
本当に、素直じゃないんだから…。」

笑っていた筈なのに、気がつくと俺の頬を涙が伝っていた。
俺はその場に座り込んで、静かに涙を流し続けた。

エピローグ 　いつか。

それからの俺は、今までの分を取り返すべく、必死で勉強に集中した。

俺達二人の、大切な夢を叶えるために。

あれだけギクシャクしていた父との関係も、わだかまりが解けた今は良好だ。

父と同じ医師になりたいと改めて伝えると、彼は何も言わず、でもとても嬉しそうに頷いてくれた。

「おゝい、英知い！最近、どうしたんだよ？」

何か、あつたのか？」

仲の良い、友達の一人在聞いた。

「うゝん…。ちょっとした、心境の変化？」

クスクス笑いながら答えると、別の男友達がこちらを指差して、大声で言った。

「もしかして、彼女が出来たのかゝっ!？」

俺は笑いながら、彼の方を振り向いて言った。

「…内緒だよ。」

クラスの奴らが何か騒いでいるのが聞こえたけど、俺は構わず教室を出て、そして窓から空を見上げた。

ねえ、サラ。

…元気にしてる？

俺は、君との約束通り、精一杯生きていくよ。

…いつか死が二人を再び巡り合わせてくれる、その日まで。

… F I N

あとがき。

『不機嫌な死神』、漸く最終話を迎えることができました。
最後まで読んでいただいた方、本当にありがとうございました。

こちらは某所に投下していたものを、書き直した小説です。
何故書き直したかというと、これは、『3号』が人生で初めて書いた小説だったからです。

読み返してみると、修正すべきところが、出るは、出るは…。
羞恥プレイに涙しながら、書いた次第です。

小説を書くようになって、漸く半年が過ぎた、超素人の私です。
それでも、修正していて思った事。

一応私、成長してるじゃんっ！

サラと英知の物語は一旦ここで終わりますが、そのうち続編を書き始めると思います。

二人の最終着地点は、ここではないと思っていますので。

既に他所では書き掛けているのですが、続きが上手く浮かんでこない…。

ラストはもう、決まってるんですけどね…。

こんな言い訳に近いあとがきにまで最後までお付き合い頂き、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2650/>

不機嫌な死神

2010年10月9日05時29分発行